

種市の歴史

(原始—中世)

種市町諸遺跡の調査報告

種市町役場

種市の歴史
(原始—中世)

種市町内諸遺跡の調査報告

目次

序文

町長

高城

専太郎

4

前町長・県会議員

館石基治

5

久慈高校種市分校主任

長岡善一郎

6

図版目次と解説

7

図版

挿図表目次

11

前篇 種市の歴史

才一章 序論（歴史理解のために）

3

1 種市の歴史の書き方

3

2 昔の歴史と今の歴史

4

3 大和國家の發展と東北の経略

6

4 二河の天台寺

7

5 廻美にっすて

8

才二章 原始時代の種市

12

1 人間と道具

12

2 旧石器文化

14

3	狩猟採集の生活	14
4	縄文式土器	16
3	早期 前期	
	中期	
	後期	
	晩期	
3	上代の種市	20
1	彌生文化	20
2	古墳文化と大和文化	21
8	土師器と農耕生活	25
4	平安時代の種市	25
	角浜の千人塚	
5	安倍・藤原時代の種市	27
4	中世の種市	28
1	鎌倉時代の種市	28
2	南北朝時代	30
8	室町時代の種市	31
後篇 種市町内諸遺跡調査報告		

1	調査前の記録	37
2	調査の経過	39
3	オ三回調査諸遺跡の概況と出土遺物	41
1	ゴソウの遺跡	41
8	有軍上のマンカ遺跡	45
8	大宮遺跡	48
4	高取遺跡	53

5	城内遺跡	54
6	箱野遺跡	58
4	その他の遺跡調査	59
1	昭和二十六年度遺跡調査	59
2	その他の調査記録	80

62	結語
----	----

65	町内諸遺跡発表名表
67	町内諸遺跡分布図

陸中海岸の南半は沈降海岸であり、吾が種市町を含む北半は所謂隆起海岸であるといわれている悠久たる日本列島形成の地質年代についてはいさ知らず、種市町の海辺山間に、はじめて居住せし吾々の先人はいかなる人々であり、又それは何時頃であつたらうか。その人々が探取漁撈より農耕に移行した年代、又蝦夷征伐の奈良平安時代、鎌倉にはじまる封建時代、戦乱の激しい中世にあつてこの町の住人達は、これらの波にいかに対処して来たか。これは単に私一人ではなく、ひとしく郷土人の抱く興味疑問であると思ふ。かゝる究明は所詮、考古学者はじめ歴史学者にまつより方法のないことであつた。

前町長館石基治氏は、かゝる地方文化史的意義を高く認識せられ、その在任中において企画着手し、既に町内の遺跡を発掘、縄文時代より土師時代に亘る広汎、且つ貴重な出土品を見るに至つた。岩大史学研究室に委託中の土器も最近殆ど復原され、函版凸版等一切の出版準備が完了し、私の町長就任後間もなくこれが刊行の運びとなつた事は、文化財保護を欠てまえないとする地方自治体関係者として心から喜びにたえないところである。

本書は日本中央の歴史の流れを軸として東北開拓と関連せしめつ町内出土品の時代考証を明確に解説すると共に、学問の権威を買ひて編纂したものであつて、必ずや町民各位に吾が郷土再認識の機会を与え、愈々愛郷の念を深め、次代を担う青少年諸君に心よりどころを提供するものと信じている。

御多忙な研究の余暇を割愛されて本著作に専念下さつた岩大草間俊一教授並びに久慈高校種市分校長岡善一郎先生、又貴重な資料提供を快諾された当町郷土史研究家佐々木剛一氏、玉沢重作氏など、発掘を承諾された土地所有者各位に対し厚く御礼を申し上げる次第である。

昭和三十八年六月十日

種市町長 高 城 專 太 郎

序 文

種市町の磯辺に、星夜をおかず打ち寄せる太平洋の浪は、幾万幾百万年の昔よりその姿を変えず質みをつづけて、やむことを知らない。この白砂青松の美しいわが郷土に、そも人はいつ頃より住み付き、いかなる生活の態様を続けて今日に至つたものであろうか。今や広大な海岸段丘には人家相次いで櫛比し、寂寥たる往古の面影更になく、時代の進展にテンポを合わせ刻々近代的な変貌をとげつつある。

英國の歴史学者トインビーは「歴史とは過去と現在との対話である」と言っているが、郷土の先人の展開し來つた足跡を史証によつてきわめ、しかる後現在の時点に立つて来るべき種市の将来を展望することこそ、吾々の責務でなければならぬ。かくて愈々吾々の身に真の郷土愛が生れ、うるふいある人間社会の成長もあるものと信じる。

最近「岩手県史」「八戸の歴史」の出版を見、戦後十数年にしてようやく北奥における往古より近代にいたる過程が史証されつつある時、「種市町の歴史」が私共の日程にのぼることとは又必然の事といえよう。幸いにこのたび岩手県文化財専門委員岩大教授草間俊一氏をわずらわし、一昨年四月下旬より五月上旬にかけて町内の遺物包含地を発掘、その調査報告をかためて古くは縄文早期より中世種市氏にいたる資料文献に基づき「種市町の歴史」の概説を編集出版するはこびとなり、こゝに数千年にわたるわが郷土の姿が初めて科学のメスによつて吾々の眼前に現われるに至つた。これは郷土を愛する者にとつてかねて求めてよく為し得なかつたところであり、その史証のにして平明な解説に加ふるに多数の図版、地図、出土地名表等を含む本書は郷土の何人も是非再読三読、常に座右にそなえて味読すべく、大方に推奨して止まないものである。そしてこれは又私の町長在任中に於ける唯一の文化的作業であつた事を思ひにつけ、感慨一入である。

本出版にあたり短時日にかゝる煩瑣な著作をおねがいした草間先生、久慈高校種市分校の長岡先生はじめ、資料提供者、発掘を承諾された土地所有者各位に対し茲に深甚なる敬意と恩謝を表する次第である。

昭和三十八年六月十日

岩手県議会議員、前種市町長 館 石 基 治

発掘印象

跡めよとした瞬間、七〇種の地下から日本で一番古い尖底土器が二つ出る。中野の大宮という海岸の高台。種市が一番美しく眺められる小路合のゴックウから、口径三五種の大壺が案外浅い所に押し込まれてたまたま横たわつていた。高取では、その住人がたつた今立つた時、そのまゝのように皿、どんぶり、の置かれた九斗の跡。有家の林の崖から前期土器にまじつて石皿と丸い磁石。木の突をつぶす道具である。城内川向の畑には、ぐつと新しく奈良平安の立派な土師のつば。ニヤクドクでは糸切底の皿と焼台が出る。当時の農民の顔が眼に浮ぶ。標刺の青磁刀形石器は日本で何個という貴重品で、権力者の象徴でもあつたろうか。八木の山手、岡谷方面からは土版、土偶。小子内の犬の土製品。全てこれらは陶版でゆつくり御覧貰ねがいたい。北野沢の石皿を見に、佐々木角中校生の御案内で早朝訪問。竊柱の道の強行軍。本年三月十三日これを最後に仕上げ調査を終る。草間先生野田へ急行。

歴史は種市より

歴史に無縁に見えた種市町は有名な「きぬ女家族書上」という古文書をもっている。「ひかしのかとたねいち……」にはじまるこの文書は正安三年即ち鎌倉時代の当地方の行政区画や戸籍のきめ手となる重要な中世古文書となつてゐる。八戸の歴史の扉に印刷されてあるのはこれ。中野の尖底土器は十年前鹿大発掘で大騒ぎした數の白浜遺跡にまさる遺物。

「若手果史」出版後のため記載されなかつたのは残念である。

まだ死闘したいこと
 拙るまで角の浜千八郎の正体は判然とせぬし、安藤氏、種市氏の考察も限がある。立石といわれるストンサークルがありそうな気がするし、具探も東北に少ないだけに究明の余地がある。無土器文化など何時の日かひよつと発見されるかも知れない。

中世から明治にいたる文献、古老の話、伝説等を整理すれば愈々種市の通史が完成されることだろう。まだまだ知らない多くの歴史の宝庫をかゝえた種市町は魅力ある町、そしていつの日か誰かこれからの郷土史家の手によつて前者の足らざるところが補はれていく事だろうし、それを私は望みたい。

昭和三十八年六月十日

久慈高校種市分校 長 岡 善一郎

図版の目次と解説

図版は才三回調査（昭和三十六年春）の際に見発掘した遺物を主とし、その他町内から出土している参考となる遺物と、才三回調査の状況に關係する写真を示した。遺物の所有者名の記載のないものは、才三回調査の際に見発掘した遺物で、現在若手大学に保管しているものもあるが、地元で保管設備が出来たら、その方に移管したいと考へてゐる。

図版才一 縄文式土器

- 1 図 早期尖底土器 大宮B遺跡出土 高さ四十三種（推定）
- 2 図 早期尖底土器 大宮B遺跡出土 高さ二十四種
- 3 図 前期採鉢形土器 ゴツクウ遺跡出土 高さ二十六・四種
- 4 図 前期採鉢形土器 ゴツクウ遺跡出土 高さ三十六・三種
- 5 図 前期採鉢形土器 上のマツカ遺跡出土 高さ二十三・三種
- 6 図 晩期付採鉢形土器（大割式） 八木駅前出土 高さ十七・五種 玉沢重作氏藏
- 7 図 後期有孔土器 角屋出土 高さ十一・三種 平内小学校藏
- 8 図 後期有孔土器 渋谷出土 高さ十二種 角浜小学校藏
- 9 図 晩期採鉢形土器（大割A式） 高取出土 高さ十四種
- 10 図 晩期採鉢形土器（大割B式） 高取出土 現在高さ十一種 館石港治氏藏
- 11 図 晩期採鉢形土器（大割A式） 高取出土 高さ八・三種 館石港治氏藏

〔解説〕 図版第一は完形または復原した縄文式土器を古いものから順次示すようにした。但し10図は7図と8図の間に入るべきものであ

図版才二 土師器と須恵器

- 1 図 壺 梅内遺跡出土 高さ二十二・八種
- 2 図 甗（コシキ） 梅内遺跡出土 高さ二十七・六種
- 3 図 皿 梅内遺跡出土 高さ二十七・六種 城内中学校藏
- 4 図 鉢 梅内遺跡出土 口径十五・二種
- 5 図 鉢 向まがれ遺跡出土 高さ八種 城下港治郎氏藏
- 6 図 鉢 向まがれ遺跡出土 高さ六種 城下港治郎氏藏
- 7 図 壺 向まがれ遺跡出土 高さ三十二・五種 城下港治郎氏藏
- 8 図 壺 横手出土 高さ二十三・五種 佐々木剛一氏藏
- 9 図 土師器の糸切底 にしやぐり遺跡出土 長岡善一郎氏藏
- 10 図 器台 高さ十三種 にしやぐり出土 長岡善一郎氏藏
- 11 図 須恵器の壺 角浜出土 現在高さ二十三種 角浜小学校藏
- 12 図 須恵器の壺（参考品） 黒沢城址出土 胆沢城収蔵保管

〔解説〕 図版第二は土師器と須恵器であるが、1図から9図までは土師器であり、その中1図から8図までは前期の土師器で、平安時代より以前に、この地方の人々の使つていた土器である。従つて、

裏といわれた人々の使つた土器はこれで、縄文式土器はそれより千年近くも前に使われていたものである。この土器は大和文化に關係のある土器で、幾種も使つた土器である。中でも2圖のゴシキを蘇ナセイロとして用いられた土器で、底はともとなない土器である。横にしたのは底の特徴を示すためである。須恵器角浜から出土しているものであるが、口頸部が欠失してない。その全形を知る野田のために、胆野城出土のものを示した。この種の須恵器は胆野中学校敷地からも出土しているが、口頸部が欠失している。掘り出す時に欠けて無くもつたものであると思ふ。

図版オ三 縄文式土器と弥生式土器の破片

- 1圖 早期貝紋文土器 大宮入遺跡
- 2圖 前期縄文式土器 ゴツツカ遺跡
- 3圖 前期縄文式土器 上のマツカ遺跡
- 4圖 前期末縄文式土器 (内筒下層D式) 城内学区内出土 城内中学校敷
- 5圖 中期縄文式土器 (内筒上層A式B式) 北野沢遺跡 角浜中学校敷
- 6圖 後期縄文式土器 胆野遺跡
- 7圖 晩期縄文式土器と彌生式土器 大宮I遺跡
- 8圖 彌生式土器 大宮I遺跡 佐々木剛一氏藏

【解説】 図版第三は調に上つて採集した土器の文様を示すために時代順に並べたものである。1圖は早期の貝紋文の破片のうち、口辺部のあるものだけである。文様のつけ方の違ひは體格が異

なることを示すものであつて、完全に残つていたら相当の数量になる。である。出土遺跡の報告を参照された。4圖は前期の円筒式土器の中に、口口の間の凹み文器形のもが現われて来るが、その破片である。5圖は内筒上層式には繩を巻きつけたより全粘土の彫刻線文が口辺部につけられているが、その特徴あるものを示した。6圖は後期のすり消し縄文の土器であるが、下右側は晩期福島式破片の破片である。7圖は彌生式土器の破片で、彌生式土器の完形品はないので、破片だけで示した。

図版オ四 石器類(1)

- 1圖 石鏃、石ヒ、石斧、ゴツツカ遺跡
- 2圖 石斧、石ヒ、ゴツツカ遺跡
- 3圖 石鏃、石ヒ 有家上のマツカ遺跡
- 4圖 石斧 上のマツカ遺跡
- 5圖 石斧 上のマツカ遺跡
- 6圖 石鏃、石ヒ、大宮A遺跡
- 7圖 石鏃、石ヒ、大宮I遺跡
- 8圖 石鏃、石ヒ、石斧、胆野遺跡

【解説】 図版第四は第三回調査で発見採集した石器だけを示したもので、夫々の名称を説明しているから、参照されたい。

図版オ五 石器類(2) その他

- 1圖 石鏃、石斧、有孔小皿盤 高沢遺跡
- 2圖 石皿、磁石 上のマツカ遺跡

本出土品はその場所から考へて、祭祀遺跡と見えた方がよいかも知れない。刺さったものである。10圖のアメリカ式石鏃はアメリカの原住民の遺跡から発見される石鏃に似ているので、この名がある。東地方で彌生式土器に伴出する例が多いので、本石鏃の出土も彌生文化に關係があると考へられる。11圖の環石は南洋の原住民の俗に、これを棍棒の先に通して固定し、武器として用いられている。従つて棍棒頭石鏃とも呼ばれている。12圖の貝輪と骨針は貝塚から発見される遺物である。種市町には貝塚の存在が報告されているが、骨角器や貝製品の遺物の保存されているものは少ない。現在本品は八木駅南、ホツタリ出土のものを佐沢氏が保管している。気仙地方、宮古地方や八戸地方にも、もっと発見される。骨針は四角が尖つていて、種市町にも、もつと見られる。骨針は貝殻から削り出されることが多い。貝輪は輪状にした装身具である。骨針は四角が尖つていて、種市町にも、もつと見られる。

図版オ六 土偶、その他

- 1圖 土偶(晩期末) 戸類家遺跡 慶応大蔵
- 2圖 土偶(晩) 依吉遺跡 角浜中学校敷
- 3圖 土偶の体部(後期) 八木向山遺跡 玉沢重作氏藏
- 4圖 土偶の体部(中期) 依吉遺跡 角浜中学校敷
- 5圖 土偶の体部(晩期) 九ヶ子の遺跡 佐々木剛一氏藏
- 6圖 釣籠形土製品 西館(同谷)遺跡 高き五蔵
- 7圖 釣籠形土製品 西館(同谷)遺跡 高き五蔵 玉沢重作氏藏
- 8圖 土印 西館(同谷)遺跡 全長三・七釐 玉沢重作氏藏

9 図 土版 西館(岡谷)遺跡 全長六・八釐 玉沢重作氏蔵

10 図 土製の犬 小子内遺跡出土 全長五・五釐 川崎清吉氏蔵

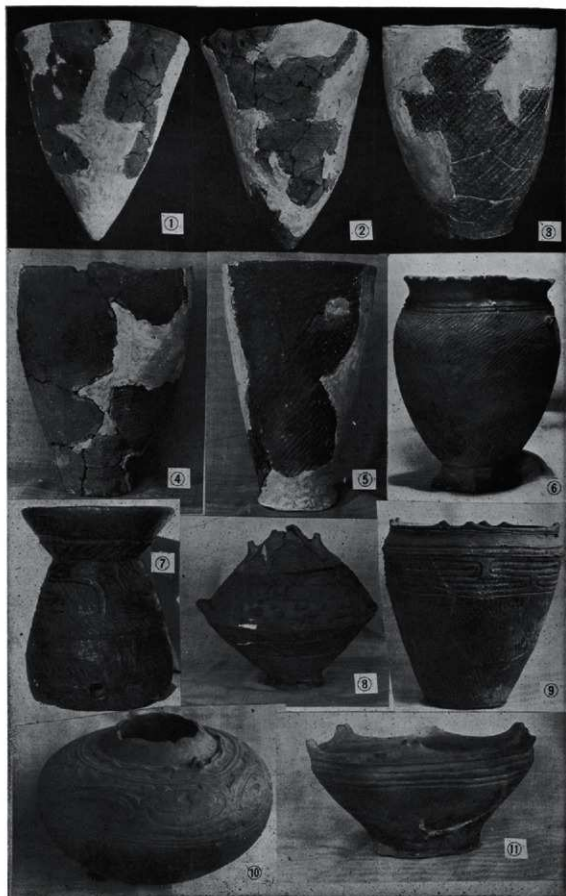
【解説】 図版第六は土製の酋長形の遺物を示したものである。土偶は埴輪と間違えて呼ばれるが、縄文時代の土の人形は土偶といわれる。埴輪は古墳時代のものである。土偶の表現も時代によつて違つた特徴をもつているが、種市町には中期から晩期までのものが発見されていて、その種類は多い方である。土偶の用途は明らかでないが、原始呪術と関係があつて、収穫の豊かなことを祈つたり、神の回復、身の安全を祈願するお守りのような役目も考えられる。土偶は女性を表現しているもので、乳部を表現しているのに特徴がある。6 図は一応佩飾石器と呼んだが、はつきりした名称がない。パツクルのように用いられたものでないかと思われる孔が二つ開けてあるので、こゝろ呼んで見た。縄文晩期のものである。7 図は紐を通す孔が上部にあるから釣り下げたもので、首飾か耳飾りでないかと考へている。縄文前期の遺跡からしばしば発見されている。8 図の土印は形からこゝろ呼ばれたものであるが、これも産物品の一種でないかと考へている。9 図土版は一応こゝろ呼んだが、普通土版と云われているものと違つている。表裏両面に僅かに骨骨のような痕があり、胴部の真中から貫いて串のようなものを差し通した孔が開いている。土偶の姿形とも考えられる。土版は一般に腰符のようなものでなかつたかと考へる。なお、①②③の出土地は玉沢氏は西山岡谷と稱しているが、三十六年度の遺跡調査では西館遺跡としてゐるので、それに従ふことにした。10 図は土製の犬で良く出来てゐる。犬の土製物は縄文

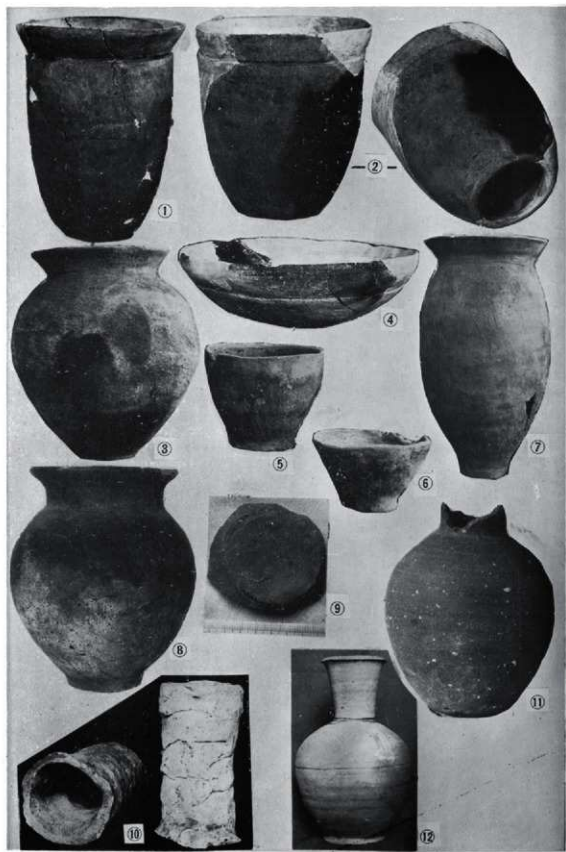
時代からあるが、この種の犬の土製品は土師器の項まで下るのではないかとも考へられる。東北地方に後にも存在するのは狩猟生活と関係がある遺物と考へる。この種の犬は県内に数例ある。

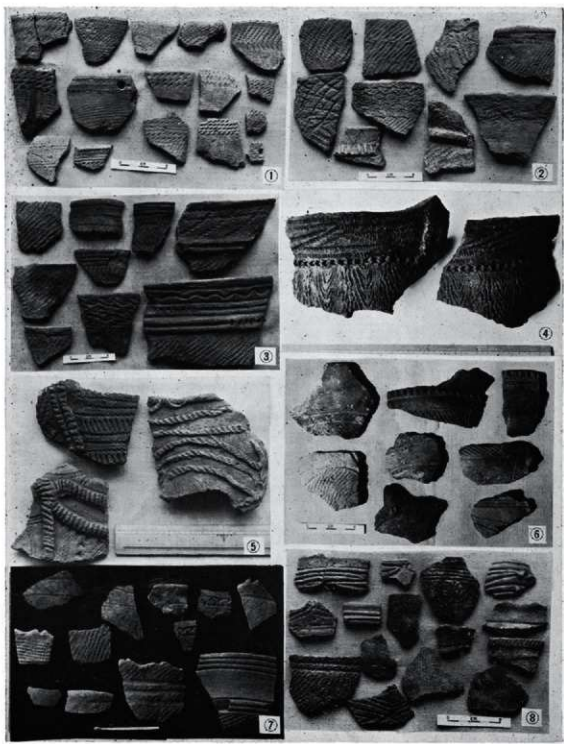
図版才七 発掘調査状況

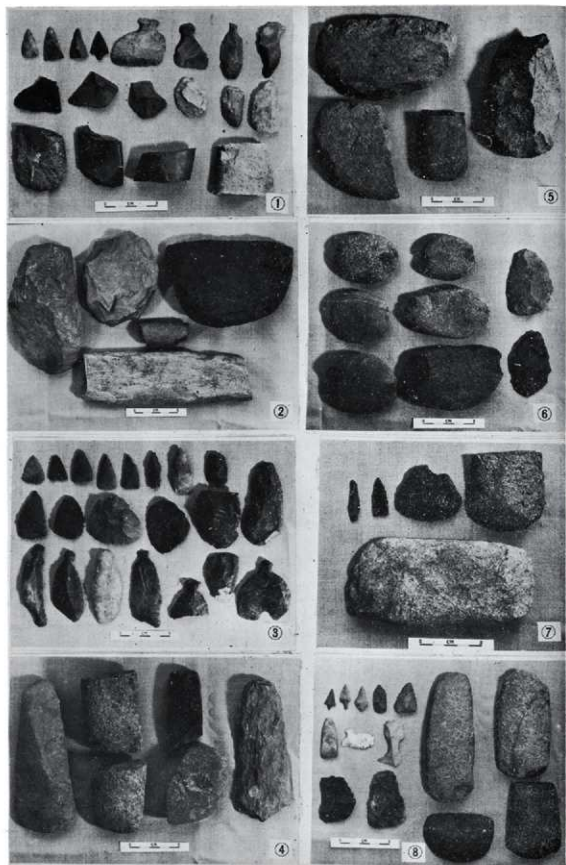
- 1 図 ゴツソク遺跡の遺棄
- 2 図 有家上のゴツカ遺跡の全景
- 3 図 ゴツソク遺跡土器出土状況(1)
- 4 図 ゴツソク遺跡土器出土状況(2)
- 5 図 梅内遺跡土師器出土状況
- 6 図 高取遺跡完形浅鉢出土状況
- 7 図 高取遺跡伊城の状況
- 8 図 城内館の全景

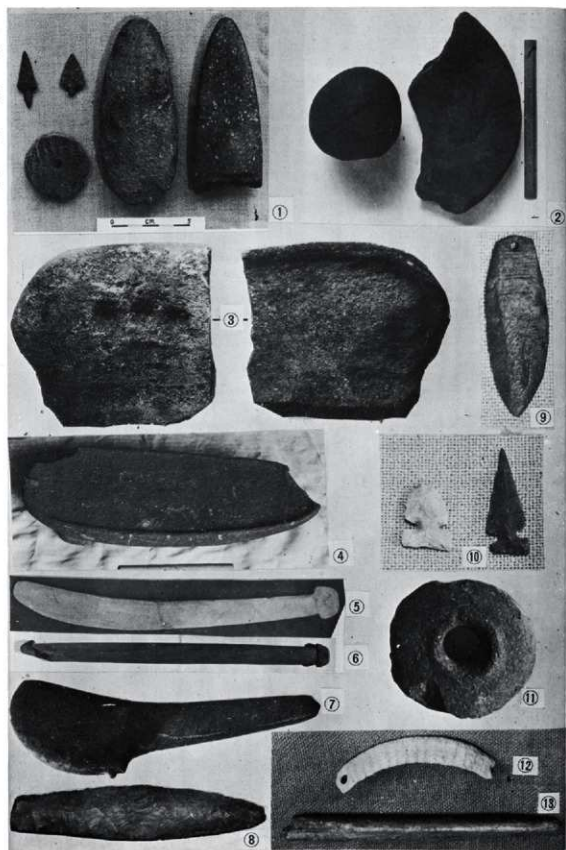
【解説】 後篇の第三回調査中に撮影した遺跡の状況や、発掘して遺物の出土した状況を調査いたぐために、数枚の写真を示すことにしたものである。8 図の城内館は長岡藩一邸氏に依頼して撮影したものである。

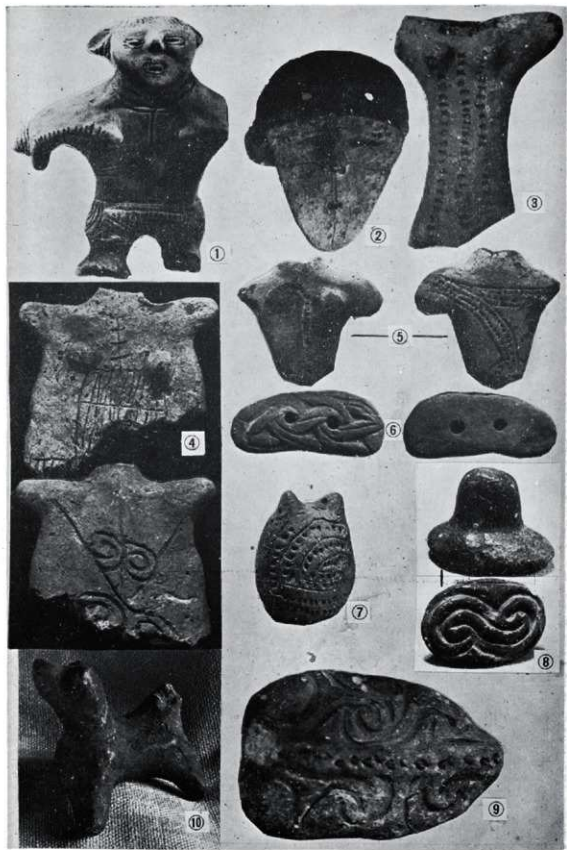














挿 図 ・ 表 目 次

才1 図	ゴソソウ遺跡出土 石器類(1) 石鏃・石匕・石斧・板状石鏃	43
才2 図	ゴソソウ遺跡出土 石器類(2) 打製石斧・横刃形石斧・石棒	45
才3 図	上のマツカ遺跡出土 石器類(1) 石鏃・石匕	47
才4 図	上のマツカ遺跡出土 石器類(2) 石斧・横刃形石斧・板状石鏃	48
才5 図	大宮A遺跡出土 石器類(1) 石鏃・石匕	49
才6 図	大宮B遺跡出土 石器類(2) 石鏃・石匕・石斧	52
才7 図	にしやくどうり遺跡出土 器台	55
才8 図	梅内遺跡出土 土師器 罌・甌・壺・皿	57
才9 図	種市町内遺跡分布図	67
才1 表	縄文時代の時期区分を町内遺跡名	16
才2 表	種市町内石器時代遺物出土地名表(昭和十一年)	28
才3 表	種市町内石器時代遺物出土地名表(昭和二十八年)	28
才4 表	種市町内遺跡地名表(昭和三十八年)	28

前
篇

種
市
の
歴
史

第一章 序論（歴史理解のため）

一 種市町の歴史の書き方

種市の歴史について述べる前に、歴史とは何であるか、昔の歴史と今の歴史がどうなっているかということから述べたいと思う。

歴史は人間と共に始まり、人間のみが歴史をもつものである。人間の存在が歴史のはじまる最初である。このことはちよつと奇異に感じられるが、重要なことである。勿論、人間がこの地上に出現する以前から時間の経過はあり、自然界の推移変遷はあつた。人間の出現した地球にも、地球の歴史といわれる自然の経過はあつたし、地球の所在する宇宙の歴史というものも考えられる。しかし、それを歴史として考えるようになったのは人間であり、人間によつて歴史があとづけられるのである。時の経過だけでは歴史ではなく、それが経過として人間に考えられて、はじめて歴史となるのである。

従つて、歴史をもつことは人間の特権である。人間が人間として自覚するとき、歴史を考えるのである。国家も国家としての自覚をもつたとき、国家の歴史を考えるのである。村が村としての発展を考え、飛躍しようとするとき、村の歴史を考えるのである。そのため、歴史を

学ぶことは「温古知新」の学であると云われる。歴史を考えることは、過去に沈潜することではなく、その過去を通して新しい自分を見出すことである。

いま種市町の歴史を考えると、現在の種市町がどうなつて、どうしようとしているかというところが、種市町の歴史の出発点でなければならぬと思ふ。その点において、私の研究は十分でないし、勿論その意欲での研究をしたものでもない。その意味で考えると、種市町の歴史を述べるには、根本的な欠陥がある。だが、私は日本歴史を研究する者として、日本歴史全体の発展の上から、種市町がどう云う状態にあつたか、どうなければならぬいかと云うことには無關心ではない。その点、現状についての調査はしていないが、原始時代から中世頃までのことについては、断片的ではあるが調査もして、私なりの考え方をもつている。

私が種市町の歴史を述べるとすれば、そう云う意味で、日本歴史全体の発展の上から、種市町がどうであつたかと云うこと以外述べられない。しかし、種市町の歴史を述べる場合、これでは不十分であることはいりまでもない。ここでは、種市町の原始時代の諸遺跡を調査した機会に、それがどういふものなのか、日本歴史全体との関

述において明らかにしようと思つて、種市町の歴史の中世までのところについて概観しようとするものである。

二 今の歴史と昔の歴史

「今の歴史は昔の歴史とちがつてゐる」と、いわれる。むかし教えられた歴史の内容が教えられず、今の教育では別のことが教えられている。そのことが、今の子どもは歴史を知らないといふことにもなる。その根本であり、本質的な違いは、天皇制国家を立前とした天皇中心の歴史であつた過去の歴史とそうでなくなつたことにある。その違いは歴史の書きはじめに最もよくあらわれてゐる。

昔の日本歴史は、イザナギ、イザナミ二神による大八洲国（オオヤマトノクニ）といわれる日本国土の生成があり、それについでその国を統治される神として天照大神の出現となる。天照大神の神徳が述べられるが、大神の住んでゐるところは日本国土でなく、高天原であつた統治者として生れた天照大神がその使命を実現するため、御孫ニギノミコトを日本国土につかすことになり、日向（今の宮崎県）高千穂峰への降臨となつた。しかし、日向の地は日本国土の中心地でなかつた。日向の三代目に神武天皇が出現して、日本の中心地大和を平定して、そこに攝政官をつくり、即位されて天皇第一代の天皇となられ、日本國家の基礎をきずかれたのである。

有形無形の威圧を受けたことが、日本の独立を確保するために、國家体制の整備を必要とした。その際天皇中心の統一國家の体制をつつたのであるが、このように天皇制國家が形成されなければならぬ所以がどこに由来するかを明確にすることは、新しい國家を支える柱として、また國民教化の大本として重要なことが感ぜられ、國史の編纂が企てられたのである。その結果として、できたのが古事記であり、日本書記であつた。

日本には、記紀以前から自分たちの祖先のことを語りつき聞きついできたものがあつたことは古事記にも述べている。聖徳太子が撰政の時、「天皇記及國記、臣連伴造國造百八十郡并公民等の本記を録したまう」とあることによつて知られる。その書き並べられた天皇記、國記、諸氏族の本記などから推定すると、天皇記が最初にはなつてゐるが、諸氏族のものと一緒に集められたもので、諸系譜のようなもの集積ではないかと考えられる。それに対して新しく編纂された日本書記は、天皇即國家の歴史となつてゐる。天皇の系譜を述べることによつて國家全体の歴史がつくされる体裁をとつてゐるのは、天皇制國家体制に則する歴史であることを意味するのである。

聖徳太子の頃は、諸豪族が中央また地方に夫々土地人民を支配して諸王として勢力をもつてゐた。その中で天皇は恐らく大王として諸王の中で最も強大な支配力をも

その後、神武天皇の子孫の歴代天皇が大和を中心に、次第にその勢力を伸展されて日本国土を統一し支配するようになつた経過が述べられてゐる。

これで見ると、日本の歴史のはじめに、日本の国土と国土の統治者のことが物語られてゐる。しかし、人類の歩んできた歴史をふりかへて見ると、人間が社会生活を営む場合、國家という政治社会をつくるように現れてから、非常に長い年を経過してからである。如何なる民族でも、國家の成立するまでの経過がある。それにも拘らず、國家の成立ははじめに書かれてゐるのはどうしてであらうか考えなければならぬ。

むかし、國が自國の歴史を書きしるすこと、その國家の起源から書きはじめるのは普通のことであつた。日本の場合でも、最初に出きた古事記、日本書記が、日本國家の歴史を書きしるしたものである点で、國家の起源から書きはじめられたことは当然であつた。しかし、その内容が前述のようなるものであつたのはその理由がある。

即ち、今から千三百年程前に行なわれた大化の改新は、日本歴史の発展として一大事件で、これによつて天皇を中心とする中央集権の國家体制が確立されることになつた。その原因として國內、国外の事情があつたが、殊に對外的には唐という大國が支那大陸に成立して、その

ついでと考へらる。そのことが歴史の編纂を行うときに、前に述べた諸系譜のようないてんを一つと考へられ、それが大化改新による天皇制國家の成立は、それに匹する歴史の編纂となつたのが日本書記で、天皇の權威とそれが國家統治を行つて至る由来を述べることになつたので、諸豪族の存在は天皇の權威に服することによつて、その存在を認められる存在になつた。

このような歴史が、明治以後の日本の天皇制國家の歴史教育において重視され、日本書記が神典のように重要視されたのである。しかし、このような歴史の叙述は、大化改新以後に出来上つたものである。したがつて、歴史が述べられてゐる順序から云へば、神話があり、それに基つて國家がつくられてきてゐるが、それが書かれるようになった経過から考えると、天皇制國家が成立して後に、それの由来を説明するために神話が前に述べた体裁にまとめられたのであつて、出来た順序は逆である。

従つて、このような國家の起源を書いた歴史をそのまゝの史実と考へるとき、色々の問題や疑問が出されるのである。事実、日本人が文字を用いたのは古くても千五六百年前でも、大化の改新の時から云へば三百年前にすなわししかすきない。それが當時、千二百年も前の國家の成立の事情を記する場合どのような史料があつたか、昔

の出来事は語り継ぎ云いついで記憶して来たと云つても二三百年もたては曖昧となり、わからなくなつてしまつてゐる。殊に年代などは不明な点が多かつた。しかし、國家の起源を書く場合、その建國の年をきめる必要に迫られて、推測してきめたのが神武紀元の年である。その場合、聖徳と仰がれた上宮太子の撰政の期間に辛酉分(ノトリ)という中国思想で革命に當る年(つまり西暦)がいつた時(千二百六拾九年)かのぼつた年を建國といふ大革命に當る年である)と推定して、神武天皇即位元年の年としたことは間違いないと考えられる。

このよゝな國家起源の歴史は、日本書紀の編纂された當時としては充分意味のあることであり、これに代るものはなかつたと考えられるが、今日諸學問が進歩発達した時において、それをそのまま史実として教へることが否定されて来たことは当然である。そして日本國家が成立するまでの、日本民族の歴史がどうあつて、どのような時期に日本國家が成立して、発展して来たものであるかといふことを、日本書紀や古事記の記述だけでなく、過去に実際に生活した人々の残したあとや物によつて、また日本と古くから交渉をもつていて、記録を残している中国や朝鮮の歴史などを参考に述べてゐるのが今日の歴史である。

そのよゝにして述べられる今日の歴史はどつてであるかについては、第二章以下で述べる。ただ、神話などによつてゐる。太平洋側の經營が積極的に進められたのは、奈良時代になつてからである。西暦七二二年に出羽國が設置されたのに、西暦七八一年に石城・石骨(岩代)いずれも今の福島)兩國が設置されている。七二四年に宮城県に多賀城が築かれ、鎮守府とされている。これによつて宮城県が、大和國家に服することになつた。

しかし、更にその北の岩手県の地域の経略は容易でなく、しばしば軍を出して敗れ、その成果を挙げ得なかつた。平安時代になつて桓武天皇の代、坂上田村麻呂によつて戦果が挙げられ、胆沢城(八〇二)、志波城(八〇三)が築かれることになり、北上川流域地帯がその支配下に服することになつた。未だ東北の馬淵川流域地帯にはその勢力が及ばなかつた。それが嵯峨天皇の代になつて、文屋綿麻呂が爾麗体の蝦夷を討平し、ここに蝦夷は全く終熄したとあるから、東北地方の經營は一応完了したと考へられる。それが西暦八一一年で、今から千五百五拾二年前のことである。

四 二戸の天台寺

この平安時代になつてから果北地方が日本國家の中に入つたといふことで、問題になるのは、二戸郡淨法寺町の天台寺である。天台寺が奈良時代の高僧行基菩薩によつて開創されたといふ傳説があることから、この地方が奈良時代に日本國家の勢力下に入つてゐたのではないか

る歴史の叙述は否定されたが、神話は神話として、古い日本人がどうしてこういふ物語を作つたかといふことは、日本人の思想、信仰、生活、風習などに關係して、興味ある研究課題として、重視されることに保ちがない。次に、今少し古しの歴史に基づいて日本の發展と東北のことについて述べて見よう。

三 大和國家の發展と東北の経略

神武天皇によつて建國された大和國家が、大八洲といわれた本州、四國、九州の全体の地域を支配して、日本國家といわれる実質をととのえるに至る過程は簡單ではなかつた。大和國(今の奈良縣)を根拠地として、崇神天皇の代に四道將軍の派遣があつて、東は尾張、若狭(熱田神宮。熱田神宮)西は丹波、吉備までその範圍となり、景行天皇の代に日本武尊の征討によつて、九州から関東地方までがその支配地となつた。その後、朝鮮半島への交渉が盛んとなり、東國地方殊に東北地方は融れられ、その經營は停滯することになつた。大化改新の頃までに至つた。

大化改新による國家体制の整備に伴い、従来疎外されてゐた東北經營が押し進められることになつた。その最初が阿倍比羅夫による秋田・能代の討平であり、その後更に津輕方面にまで、その勢力が及ぶよゝになつた。これは東北經營が先ず日本海方面から進められたことを物と考へられることである。なぜならば、奈良、平安時代の日本國家の東北地方經營には武力の征討と仏教の教化が併行して行なわれており、仏寺の建立と仏教の教化が國家の支配権力の確立があつたからである。その前に、岩手県の北上川流域地帯が日本國家の支配に服しない以前に、東北の馬淵川流域が日本國家の勢力が及んでゐたこととなる。若しその可能性を信ずるとすれば、果北方面には、既に日本國家の勢力が及んでゐた秋田県方面から、安比川に沿つてその勢力が及んで来たといふ考へられない。この点から考へると、天台寺の文化は舊日本の文化であるといふ主張がなされ、果北一帯は果南より早く日本國家の勢力に入つたこととなる。

しかし、天台寺が奈良時代の行基によつて開創されたといふ傳説は、根拠のあるものでなく信ずるに足らない。勿論、行基がこの地に来たなどと云うことは到底あり得ないし、また奈良時代に作られたと考へるに足る手がかりとなるものは何もない。それに反して、平安時代になつてこの地方が日本國家の支配に服した頃、創建されたものではないかと考へるとき、現在寺に本尊として伝へてゐる十一面正觀音ほかの諸仏像がある。これらの仏像は鉈形をはじめ丸ノミを用いて作られた仏像で、平安時代のはじめの頃の作と考へられてゐる。この様式の仏像は平安時代の開拓地である北上川流域地帯の各地に多く存在してゐて、それと關係ある仏像ではないかと推定

される。かく考えると、日本の歴史に記述されている通り、東北の文化は北上川流域を溯つて来た文化であつて、平安時代になつて日本国家に入つたものと考へる方が正しいと考へる。かくてその際、天台寺は東北地方の教化の中心として建立されたもので、東北地方の人々の教化に重大な役割を果すことになつて、多くの人々の尊崇を受けたのである。

五 蝦夷について

大和國家が日本を統一する過程において、東國から東北地方にかけて住んでいて、大和國家に敵対し、征服されて行つたのは蝦夷と書かれている人種である。この蝦夷は平安時代のはじめまで岩手県に住んでいたが、この人種はどう云う人種で、どう云う文化をもつていたものなのであろうか。この蝦夷は当時エミシと呼ばれたものであると思ふが、この蝦夷の文字は江戸時代以後北海道に住んでいた原住民アイヌ人に対しても用いられた。その場合、エゾと呼んできた。この蝦夷といふ一文字を當てて書かれた、むかしのエミシと後のアイヌ人のエゾと同一のものであるか、違ふものであるか。それと関連してエミシと対立した日本人とはどう云う人種なのか。興味ある問題であるので、一言放れて置きたいと思ふ。

日本書紀を見ると、蝦夷について次のように書いてあ

日本書紀が編纂された頃、大和國家の日本人が接したエミシは東國地方殊に東北地方に住んでいて、大和朝廷に敵対していた。しかし、エミシはもと東國地方だけでなく、大和國家がその基礎を置いた奈良県にも多く住んでいたことは、神武天皇の次の歌によつても知られる。「エミシヤ、ヒタリモモノヒト、ヒトハイヘドモ、タムカヒモセズ」。神武天皇はこれらのエミシ等を討平して後をはじめて、大和國家の基を定めることが出来たのである。このように考へてくると、エミシはもとこの日本國土に住んでいた原住民であつて、大和朝廷の日本人はそれを征服して、國を建てたことになる。そうすると、この大和朝廷を作つた日本人とはどういふ人種なのであるか。原住民のエミシとはどういふ關係にある人種であるのか反問されてくる。

大和朝廷の日本人が、神話が伝えるように天から降りて来た民族などとは考へられないとすれば、この地球上のどこかにその原住地を求めなければならぬ。日本書紀によれば、日向(今の宮崎県)から兵を起しているから、九州地方に住んでいた民族なのであろうか。しかし、同じ日本書紀では、九州地方には熊襲といふ異人種が住んで勢力をもつて大和朝廷に敵対していたが、大和朝廷に次第に支配されて行つたことになつてゐる。九州地方でも、この熊襲とは別に宮崎県地方だけに住んでいたと考へれば、余り日陰の存在でしかなく、熊襲に追い出され

る。

「其の東夷の讎性暴強にして、凌犯を宗と爲す。村に長なく、邑に首なし、かのおの界を貪りて、街を遮りて、盜略す。また山に邪神あり、郊に姦鬼あり、術を遮りて、徑にふさがり、多くの人を苦しめしむ。その東夷の中に、蝦夷是れ尤も強し。男女交り居て、父子の別なし。冬は、則ち穴に、夏は則ち塚にすむ。毛を衣、血を飲み、昆弟相殺し、山に登ること飛禽の如く、草を行くこと走獸のごとし。愚をうけては則ち忘れ、怨をみては必ず報ゆ。是を以て箭を頭髻におさめ、刀を衣の中にはけり。あるいは兜を聚めて辺界を犯し、あるいは農桑を伺ひ以つて人を略す。撃てば則ち革に隠れ、追えば則ち山に入る。故に往古より以来王化に與はず。」

エミシの人種、民族、文化についてのこのような記事は、奈良、平安時代になつてからの記事でも大差はない。例えば、平安時代の桓武天皇の頃、蝦夷を王化にしたがつた内地に移住せしめて「夷酋(蝦夷の頭目とらえられた因人)等狼性いまだ改らず、野心(宮野を性馴らし難し、あるいは百姓を凌し、婦女を計略す。あるいは牛馬を掠め取り、意にまかせて乗用す」と、云われる状態であつた。このような記事から推定されるエミシは、日本人とは違つた異人種、異文化の化外の民であつて、アイヌ人と關係の深い人種と考へられる点が多い。果してそりであろうか。

たどし考へられない。それなれば、大和朝廷の日本人は外國から渡来してきて、一時のそこに住んでいただけで、それが去つて後には熊襲が再びそのを征服支配していたと考へられるであらうか。そうした場合、原住地が外國で、宮崎県に一時根據を置くことになつた事情にある民族を現在さまざまの學問的立場から探しても、探し出すことは出来なかつた、またそれに該当するような國外の民族の存在の可能性は全くないと云つてよい。

このように考へてくると、大和國家をつつた日本人も、何も特別の存在でなく、蝦夷や熊襲と同様な原住民で、古くから日本國土に住んでいた人種であると考えられるが、一番妥當と思はれる。そうした場合、日本國土には西の方から熊襲、日本人、蝦夷といふ三種の原住民が住んでいたといふようなものでなく、この東北から西南に細長く弓なりに伸びている日本列島では、氣候、風土の若干の相異もあつて、各地域の地域性は若干あつたであろうが、人種を異にするような対立があつたのでなく、日本民族として住みついてゐたものであろう。その日本民族の中から、今から千七八百年前に大和地方に優れた人物があらわれて大和國家のもとになつた國をつくり上げた。その國には代々優れた人物が出て、その頃他の地方に出来た國を次第に支配して行つて強大な國を作り上げて行つた。それが日本國內において、東に西に發展して行く過程において、その敵対する勢力を東では蝦夷

と呼び、西では熊襲と呼んだものである。

この大和を中心とした日本国家が東は関東地方から西は九州地方まで統一して日本国家をつくり上げた頃の頃は、朝鮮半島には先進国中国の文化の摂取地として、日本国家がその軍事的にも文化的にも重大な関心のあつた地域であつた。この半島経営へ大和國家の勢力が傾倒された結果、東北地方は疎外されることになり、長く日本国外として特別視することになつたのであろう。それに加えて、当時中国から伝わつてきた中華思想(自分たちの所が最も向け進歩している、他の地方は野蛮未開なところ、人問も劣つてゐるという考え)が、東北の地を益々異狄野蛮視したものと考へる。したがつて、エミシも日本人と本来対立する民族として存在したものでなく、日本人本土に住む同じ原住民であつた。それが大和國家が形成されると共に、勢力の及ばない土地に住む人々を対立する民族として意識し、野蛮視するようになつたと考へるのが妥当である。

しかし、未だ一つの問題として残るのは、岩手県から北にかけて特に多いアイヌ語に因んだ地名の存在である。これは東夷全部といわなくとも、岩手県及びその北部にはアイヌ人が多く住んでいて、それが蝦夷と呼ばれたのではないかと考へらるゝことである。この考へ方については、東北地方にアイヌ人と同一系統の人種が住んでいて、それが原住民であつたという考へ方は、前に述べた論拠

その文化の内容については後に述べるが、相当高度な内容をもつていたことが今日明らかにされている。それだからこそ、坂上田村麻呂のような優れた武将によつてのみ、その征服が可能であつたのである。

その大和國家の國土統一も平安時代初め東北地方の平定によつて一段落し、この新支配地の經營に力が注がれた。そのため蝦夷と云ふれた人々を内地に移住したり、南方の人を東北に移住せしめたりして原住民との融和を計ると共に、仏教を布教して人心の教化に努めた。また東北地方に黄金の産出したことが、帰化人などを移住せしめて資源の開墾に努めることになり、北方的な原住民に新しい要素を注入することになつた。それに対して津輕海峡を隔てた北海道は別の國として日本から判つてきり切り離され、特殊視されることになつた。殊に北方で氣候の寒冷なことは、米食を主とする日本人にとつて不適な土地として顧みられなくなつた。

勿論、北海道と本州との交渉が全くなかつたとは云われなにしても、原始時代の狩猟採撿の生活をしてゐた時代と農耕栽培の生活を営むようになつた時代の両者の關係は著しく変化し、昔のような類似はたなくなつたと考へられる。云いかえれば、平安時代以降の両者の生活の差異は著しくなり、両者の交渉は部分的に偶発的であつたにしろ、全体的に見れば隔絶して行つたと考へられる。即ち、北海道は孤立した島として、そこに住む原

と矛盾するものではない。なんと云へば、原始時代アイヌ人と云ふ日本人といつても、同じ日本國土の原住民で、より並べて區別される存在でもなく日本國土の原住民でありながらも、東北から西南に細長くのびていて、地形的にもいくつか区切られ、氣候、風土の差異もあることは、同じ日本國土に住む日本の原住民といつても、全く同一の文化内容をもつてゐたわけではなく、東北地方と九州地方では相當の差異があつた。東北地方北部が北海道の南部と類似し、東北地方南部が関東地方と類似してゐて、殆んどその差異を認め難い文化内容を示してゐたことは、判つてゐた國境のない形で相互に交渉し合つた結果當然のことであつた。その点東北地方が北海道と共通性をもつたことは疑いないことであるが、それが日本國土の人種や文化を本質的に違つてゐたかと云うことは別問題である。

この東北地方を異人種、異文化と対立して考へたのは、大和國家の成立とその支配地の確定が、もたらした結果であつて、本来の相異ではない。殊に大和國家の成立という統一権力の成立は、それに隣接した地域にもそれぞれ地方権力の成立をうながし、地域的な小國家を形成させた。それが恐らく「胆沢の蝦夷」とか「爾羅体の蝦夷」と呼ばれたものであろう。従つて、これらは南方から侵入して来る大和國家の軍勢力に対抗して戦へる組織をもつていたので、決して原始無智な野蠻人ではなかつた。

住民と本州に住む日本人との生活内容も異なり、人種的な交流も殆んど行なわれないう状態に置かれた時代がつづくことになつた。このことが、本来相似た人種としてあつた東北地方の人種と次第に別な人種となるようになり、人種が形成されて行くことになり、それがアイヌと呼ばれる人種となつたと考へたい。即ち、日本の原住民は日本本土では日本人になつたし、北海道ではアイヌ人となつたと考へるのである。勿論、原日本人が今日の日本人に属するまでには、生活環境の変化もあろうが、人種的には帰化人の朝鮮系の血も相当入つてゐる。それに対してアイヌ人は生活の変化も比較的少なく、混血のものも少なくなつた。このことが、江戸時代以後の日本人の眼に、異人種、異文化として映する程の差異をもたらしたが、このような差異が本土に住む人と北海道に住む人の間にはじめからあつたものではなく、平安時代以後の歴史發展の過程において形成されて來たものとも考へるのである。

従つて、岩手県の人が自分の祖先はアイヌ人だと考へることも、日本人だと考へることも何れも正しいと思ふ。しかし、日本本土に住んでゐた限り、日本人であり、その地にある原始時代の文化は日本人の祖先の文化であつて、アイヌ人の文化ではない。日本本土に成長した文化と全く異質な近世のアイヌ人の文化とそれに関連するもの以外、アイヌ文化として取り出せる文化は原始時代の

と考えた場合、土器が作られたのは世界で一番古いと
ころでも一万年以前に溯らなく、八九千年位前にしかず
らな。

二 旧石器文化

日本で昔から土の中から出て来る土器として縄目の文
様のある土器が注目されていて、それを縄文式土器と呼
んで来た。この縄文式土器と一緒に矢の穂石と云われ
た石鏃や石の矛などの石器が発見されて、金属で作つた
道具は発見されなかつた。従つて縄文式土器を作つて
いた時代は新石器時代であるとされた。そして、これら
の土器や石器の出るところは、黒土層のところであつて、
その下の粘土混りになる赤土層からは何も発見されるこ
とがなかつた。

戦後の日本の考古学の発達は、従来日本では人間の作
つた遺物が無いと考えられていた赤土層の中からも、石
器を発見するようになった。この場合は、今までのよう
に石器と土器と一緒に発見されるといふようなことはな
く、石器だけで土器はなかつた。土器は土の中に入つて
れば黒化するところがなくなり、保存されている筈であ
るが、この赤土層になると土器がなくなり、石器しか
文化となつている。この点から、無土器の文化と呼ば
れることもあつたが、土器以前の旧石器時代の文化の存
在が日本の國土に実証された。そしてそこから出土する

石器は欧州やアジア大陸から発見されている旧石器とも
比較され、日本國土に旧石器時代の存在を物語るように
なれるようになった。しかも当時日本に住んでいた人間
の頭骨や四肢骨が静岡県から発見され、三ヶ日人と命名
されて、その身長も男性で一米五十釐と推定されている。
このようない旧石器は、東北地方での発見例は現在のと
ころ少なく、福島県、山形県、青森県で報告もされて
いるだけであるが、北海道には比較的多く、関東にも多いから、
岩手県で発見されることも近いであらう。種市町出
土の旧石器らしいものを青森県の人で所持している人が
あると聞いているが、未だ見ていないので、報告もされて
いないから、はつきりしたことはわからない。西郷井郡
花泉町ではこの当時日本に住んでいた獣骨が多数発見さ
れ、それと共に石器らしいもの発見も報告されている。
しかし、このようない旧石器が日本で発見されて、その研究
がすすめられてから未だ十五年も経過していないから、
今後の発見とその研究が期待されている。

三 狩猟採拾の生活

人間が生活上に必要な食料を栽培生産するようない
段階は相当進んだ段階であるが、自然にある動物や植物
を狩猟採拾して生活する不安定な生活を嘗む段階は古く、
このようない時代を原始時代と呼んでいる。世界の歴史を

見るとき、旧石器時代は原始時代で、土器を作るように
なり、貯蔵用具の発達と共に農耕栽培の生産の生活が行
なされて来ていることが知られる。しかし、日本では縄
文式土器を作つて、土器を非常に利用するようになった
時代になつても、自然物の狩猟採拾の生活を営んでいて、
農耕栽培の生産生活を行つていた痕跡がない。

その理由として考えられることは、日本では昔から「山
の幸」「海の幸」といふ言葉があるように、日本の風土、
自然がさまざまな副産物を繁茂させて、多くの木の実を
供給して呉れたり、この条件がいろいろない動物を捕集せ
しめて、人間の食料となつた。また四面海で囲まれた状
態は、さまざまな魚貝を食糧にのほせればかりでなく、
川には鮭をはじめ、沢山の魚が泳いでいて、人間の食料
とされる条件に恵まれていたことが考えられる。我々は
当時の人々の石や骨角で作つた道具を見るとき、当時の
人々の食生活の状態を知ることが出来る。

木の実を加工するため用いられた石皿や丸いたたき
石、狩猟の道具として矢の先端につけた石鏃、投げ槍の
先端につけた石槍、獣類の皮を剥ぎ、肉をそぐ(當時は今
のように肉は切らな)のに用いた石じ、また漁撈の道具で
は、骨や角で作つた釣針や釣竿など、魚網も使用され
しく石の網りも土で作つた網りなども発見されている。
以上の諸道具は図版第四、第五参照。狩猟具としての弓
は木のため腐り易く保存され難いが、八戸市は川邊跡は

泥炭の湿地のため、弓や木刀まで発見された日本でも珍
らしい遺跡である。

当時の人々は狩猟採拾の原始生活を営んでいたと云
うが、その当時はそれの一つのまとまりある社会生活を
営んでいたと考えられる。最近二戸郡福岡町畑野で発見
されたストーン・サークルと呼ばれる石造遺構は、それが
墓地であるにしろ、記念物であるにしろ、当時集団生活
が営まれてなかつた作り得ない營造物である。また平
内中学校に所蔵されていた骨電刀形石器(図版第五の④)
はその形から実用の道具とは考えられず、何か特別の権
威を示す道具と考えられる点、集団の首長のしるしであ
つたのかも知れない。

また、当時生活の不安定な中にあつても、身を飾る風
習があつた。彼等の衣服は夏は裸体で、冬は獣皮を着る
単純なものであつたから、身体自身に着けた。それは今
日南方の土人が耳たぶに孔を開けてそこに何かぶらさげ
つけているように、当時の人々は耳たぶに孔をあけて耳栓を
つけて、それらぶら下げたと考えられるものに釣鐘形の土
製品(図版第六の⑤)がある。その他顔面に入墨をする風
もあり、土偶の顔面に見られる文様や線は入墨の形を現
わしているのと推定される。また腕には貝で作つた貝輪を
(図版第五の⑬)をはめて裝飾とした。

四 縄文式土器

新石器時代になつて日本人の使つていた土器は縄文式土器と呼ばれている。一概に縄文式土器と呼ばれているが、そのような土器を作りはじめた年代は相当古く、また長い間作り用いられていた。今日そのはじめが何時頃かということが問題になつて、今から九千年前であるか云う説もあれば、五千年前位であるか云う説もある。大体七千年前頃と考へても良いではないかと思ふ。前に述べた大化改新から今まで千三百年という年数から考へても、相当むかしのことになる。その縄文式土器はそれから二千年前頃まで使用されていた。そうすると五千年間という長い間、縄文式土器を使用していた新石器時代が続いたことになるのである。

このように長い間に作り使用していた縄文式土器は、如何に進歩して来たのである。勿論この間に生活も変化して来た。我々は縄文式土器について、その器形や文様の特色から、早期、前期、中期、後期、晩期の五つの時期に分けて考へている。その夫々の時期の年代がどうであるかはつきりしないが、一応次の表の如く分けられると思ふ。

第1表 縄文時代の時期区分と町内の遺跡名

時期	今からの実年代	土器の出土地
早期	7000前～6000前	中野大宮A・B
前期	6000前～5000前	中野有家 種市ゴツソク
中期	5000前～4000前	平内、伝吉 上のマツカ
後期	4000前～3000前	和座、館野 八木、西館岡谷
晩期	3000前～2000前	九ヶのこ、高取 八木駅前、西館田

次にその各時期の土器の特徴と種市町での遺跡の状態について述べる。

早期(図版一の一、三、四、図版二の一、二) 土器は容器であるためには、底が平らで安定性のあるのが本来であるが、この時期の土器は底が尖つている。そして縄文式土器といつても、縄文がなく貝殻文様の土器である。貝殻文はナルボウやアカガイなどの貝殻の腹でこすりつけた条痕があつたり、腹縁を押し付けてギザギザの文様をつけた土器である。この土器片が県内で一

番多く発見されているのは、岩手郡玉山村日戸であるが、それについで中野大宮A遺跡である。

後編の大宮遺跡の報告で知られるように、簡単な試掘と表面採集で得られただけで多数の数量になつてゐるばかりでなく、貝殻文では県内ではじめての復原出来る土器を出した遺跡であることを考へると、非常に重要な遺跡であることが了解出来ると思ふ。

このように貝殻文器を出したる遺跡は八戸市及びその周辺に多く、それらとの類似して、両者の関係のあることが考へられる。そして、尖り底の土器がなぜ作られて、平底の土器が作られなかつたか云うことについては明らかでないが、当時地面に穴を掘つて、掘立りの家を作つて住んでいた状態において、地面を床とする場合、尖り底の土器を地面につき刺した方が土器を安定させるのに都合がよかつたのかも知れない。

大宮遺跡出土の石鏝(図版二四の四)は岩手県早期のものとして、この遺跡のもの以外ない。

前期(図版一の二、三、四、図版二の三、四) 縄文は捻糸文と縄文に分けて考へられる。二本の繊維

を捻り合せて作つた捻糸を押し付けたり、それを細い棒に巻き付けたものを回転させて付けたものが捻糸文であり、三本以上の繊維を捻り合せて作つた紐や捻糸を二本以上捻り合せて紐を回転させたり、それを棒に巻きつけたものを回転させて付けたものが縄文と云われている。

昔繩籠を押しつけたと考へられた説は否定されている。そして縄文と捻糸は色々の組み合わせ方で、更に文様の上から色々の名称が生れてくるのである。

この捻糸文を含めた縄文の土器は、早期の末から現れてくるが、前期の時期に著しく発達して来るのである。この時期の縄文式土器は岩手県では盛岡付近を境として、東北から青森県、北海道南部地方を範囲として、円筒式土器と呼ばれている丸い筒形の器形の土器が盛んに作られていて、県南方面の深鉢形の土器と異なる特色を示している。文様の点においても円筒式の土器は縄文と捻糸文が盛行しているのに、県南の方面ではその他に竹管文(簀竹を平分に押しつけた凹形文やそれを平行した線を引いた文様)などが施されつつある。このように地域による土器の器形や文様の相異は早期の時期には、東北、北海道を一円としては見られなかつた点であるが、この時期を特色付けてゐる。

この前期の円筒式土器は大きく四つの時期に分かれて変遷して行つたと考へられ、それを古い方より下層A式、下層B式、下層C式、下層D式と分けられている。このうち下層A式の土器を出した遺跡が種市町のゴツソクと中野有家である。共に復原可能な土器を出している県下で重要な遺跡である。

この二遺跡共丘陵の斜面に位置し、現在の地形から考へると非常に不安定なところの位置している。当時の地

形も今日と大差ないと思われなければならないが、樹木の生い茂つた景観は今日畑となつて居る状態と相異し、傾斜面の方が見はらしがよく、住居とては好適であつたのかも知れない。前期末円筒下層D式の土器は城内出土といわれる図版第三の4図に示したものであるが、その精細な出土地は明らかになつたが、この土器の出土地は前期末の良好な遺跡と推定されるものである。この種の土器の多数出土しているのに九戸村田代遺跡がある。(岩手大学考古部年報に発表し九指種あり)

中期 (図版三の6)

狩猟採拾を産業としていた縄文時代において、中期の時期は特徴ある発達を示した時期である。その作られた厚手の力強いたくましい氣力にあふれた土器から、当時の狩猟民の活力に満ちた生活を推定すること出来る時代である。この時期の界内の遺跡は著しく多くなり、土器も大形の立体的感じのする厚手の土器が作られている。この時代の代表的土器は中部地方から関東地方に出土しているが、北奥地方もそれらの文化に關聯して、厚手の土器が作られているが、文化の大勢は前期の円筒文化を繼承して、それを発展させたものであつて、これを円筒上層文化と云つてゐる。

円筒上層式土器は円筒下層式の上から出土するというのでその名が付けられているが、前期の円筒下層に比べて努力がなされるようになった。その結果が、集団の狩猟漁撈の実施、食物の保存加工の工夫などである。例えばこの頃は狩猟の道具である石鏃の形にも様々なものがあつたと共に数も相当多くなつてゐる。石斧などの形も整つた美しい仕上げのものがある。土器での著しい変化は、精製と粗製土器の区別がはっきりし、日用の貯蔵用や煮沸に用いた粗製土器は深鉢形で単純な縄文文化のものであるに、精製土器は比較的小形で、文様も美しく施されてゐる。平内中学に所蔵する和庭出土という壺形土器はこの頃のはじめのものである。この土器は下の方の孔が開けられていて、何に用いたのか明らかでないが、特異な土器である。これに關聯してこの頃では実用の以外の土製品が作製された。例へば釣籠形土製品(身六の7図)は垂輪用装身具の一種でないかと思われ。また土印と呼ばれている用途不明の土製品もある。土偶といわれる人形の土製品もこの頃に沢山作られてゐる。一つの護符のような役割をもつていたのではないかと思はれる。

このような実用以外のさまざまな土器その他土製品が作られている社会においては、人々の生活が次第に複雑になり、集団の生活も営まれて来ても考えられる。最近報道されているストーン・サークルと云われる環状石の石造遺構もこの頃のものに大規模なものがあつて、それが墓地であるか祭祀場であるか、また両方の意味をも

て、口辺部が波状の突起をもつようになり、その口辺部に粘土紐をはりつけて、縄をからみつけたような隆起線文をつけて土器となる。このような隆起線文の施すのに応じて口辺部も肥大してきてゐる。この円筒上層の土器は最初の単純なものをA式とし、その隆起線文の著しく発達したのをB式と呼んでいる。図版に示したものは右上がA式の破片は伝吉に多数出土しているが、玉沢氏所蔵のものは有家上のマツカ出土のものであり、平内小学校保管のものは出土地不明であるが、恐らく学区内から出土したものである。

中期の頃になると隆起線文で渦巻形の文様をつけた土器が岩手県には多くなり、県北の地方にも多く発見されているが、種市町内では今度の調査中にはついに見ることが出来なかつた。これについては今後の調査によつてその有無を明確にしたいと思へてゐる。

後期 (図版一の7、8、四、図版三の6)

原始時代の狩猟採拾の生活も、今から三〇〇〇年前頃になると相当進んで来た。海を隔てた中国では、この頃は青銅器の文化も発達し、農耕生活も著しく発達して来た。しかし日本では、依然石器だけを使つていて、原始狩猟採拾の生活を営んでいる状態であつた。それでも長い狩猟採拾の生活を經過している間に、その生活に改善工夫をこらして、より良い生活の安定をはかる

つていたか明らかでないが、このようなものが作られるところに集団の一のきまりを見出すことが出来る。今度の調査で、実際に踏査したところでは館野遺跡から後期の土器(図版三の6)が多数採集された。表面採集ではあるが多数の土器が採集された。角浜小学校所蔵の渋谷出土の後期の土器(図版一の8)は香炉形の土器である。玉沢氏所蔵の西館岡谷出土の種々の土製品は後期のものと考えられ、種々の珍しいものがあり、当時の進んだ文化の状態を推測することが出来る。

晩期 (図版一の9、11、四)

縄文時代の最後の時期である。この期の縄文式土器は薄手の精巧な土器で、雲形文、ワラビ文、工字文などが美しく施されている。この頃の日本の文化は東北地方が最も発達し、精製を發揮した。そしてその文化は関東、中部地方から畿内の地方にまで影響を与えていた。

この時代の土器は陸奥式、出奥式とも云われ、青森県亀ヶ岡出土の土器によつて亀ヶ岡式土器とも呼ばれたが、最近では大船渡市大洞貝塚出土の土器を標式として大洞式として大洞式土器と云われ、古い方からB式、B〇式、C式、D式、A式、A'式の六型式に分けて考えられている。この頃は石器時代の文化も著しい発達を示し、種々の精巧な土器を作り出してゐる。

殊に、注目すべきは八戸市は川遺跡で、そこからは晩期の土器と共に多数の木製品が発見されている。その作

りは大変精巧で金属の道具をもつて加工したのではないかと云う人がある程であるが、金属器の発見されたものはないから、石器で作られたものであるが、それ程精巧な作りである。また漆を塗つた木製品もあり、その美しい文様に、その文化の進歩の著しさを知らることが出来る。

この遺跡は泥炭層のため幸い木製品が保存されたのであるが、縄文の遺跡はこのような状態の遺跡がないので、同様な文化を他に見ることは出来ないが、他の晩期の遺跡でも同程度の文化を所有したと考へても良いであろう。石器や土器では精巧な遺物を出土する遺跡は種市町内に

第三章 上代の種市

一 彌生文化

人間社会の発展は、狩猟採拾の自然経済から農耕栽培の生産経済の段階に入ることによつて一段と進歩したと考へられる。農耕生活は人々を一定の場所に定住せしめると共に、土地支配に必要の関心を高めた。そして集団的な規制のある社会を必ずとした。

日本人の農耕栽培は米作りからはじめられたと考へられるが、この新しい生産技術は、狩猟採拾生活の不安定な状態を克服するために日本人が考へ出したものなのか、

も相当ある。中でも竹の子、高取、戸類家、西館などは注目すべきものである。いずれも本格的な調査が行なわれたのはいないから、今後に期待されていること大である。

この晩期の土器は余り精巧で秀れているので、東北地方で相当後にまで使われていたものでありとし、それが蝦夷(エミシ)の文化と考へたのに喜田貞吉などもあつたが、現在では二千年前項までで終末をつけ、新しい弥生文化の影響が岩手県にも及ぶようになり、文化の内容が變つて行つたと考へられている。

外国からの影響によつて習得したものなのか議論のあるところだが、前章に述べたように「山の幸」「海の幸」に恵まれた日本人は、狩猟採拾の生活が不安定ながら、それに安住する傾向が強くなり、それを打開して新しい技術を考え出すこともなかつた時に、大陸方面から新しい文化の刺激があつて、米作りの農耕を営むようになつたものと考へる。なんとすれば、この米作りの文化が起つた際には、新しい土器の製作が行なわれ、それと一緒に従来知らなかつた金属器の使用が行なわれている。この新しい土器が弥生式土器である。

る。

また、その出土地も農耕生活が営まれたかどうかと疑わしいところである。大宮の弥生式土器の採集される地点は、縄文式土器の採集される場所と同一であり、その範囲は狭い。下閉伊郡岩泉町赤穴の弥生遺跡は、人が歩いて行くにも不便な断崖の中腹にある。従つて、弥生式土器が出土したからと云つて、東北地方北部では、西日本に見られると同じ文化様相を呈したとは考へられえない。また静岡県の登呂に見られた農業経営が行なわれたとも考へられない。

しかし、大宮に出土した弥生式土器は、新しい文化との接触交流の結果作られたものである。水沢市出土の弥生式土器には靉夷があり、青森県の田舎出土の弥生式土器にも靉夷あり、米作りを知つていことが明らかになつてゐる。

なお、岩手県の弥生式土器の作られた頃用いられたアメリカ式石鏃(圖版第五の10型)は大平から出土している。これも弥生式文化との接触交流のあつたことを物語るものであつて、種市町にも農耕の知識が相当早く入つて来ていることが考へられる。

二 古墳文化と大和文化

弥生文化が大陸文化の影響により日本に展開したと

この新しい弥生式土器は、はじめ東京都本郷区の弥生町から発見されたことから、この名称が付けられたが、一番最初作られ使用されたのは北九州地方であつた。この農耕栽培の弥生文化は一度日本に入つて来ると、狩猟採拾の不安定な経済生活に苦しんでいた日本に、急速に採用され、比較的短時間の間に日本全体に波及することになつた。弥生文化の入つたのは二千年前項であるが、二百年経過した二千年前項には関東地方から東北地方の一部にまで及んだことであろう。そして岩手県にも千八九百年前項には入つて来たと考へられる。

弥生文化の米作りの技術は、今日の農業のように進んだものでなく、生産高も低かつた。従つて米を作つたからといつて、農業だけで生活したのではなく、従来の狩猟採拾漁撈に依存する生活によつて、その生活を支えていたと考へられる。弥生時代の銅鐸の絵面に、農耕生活を物語るものがあると共に狩猟や漁撈の絵面のあることは、当時の生活を物語つていと考へられる。これも農耕生活も相当進んだ畿内のことであるから、米作りでは気候的に恵まれない東北地方の北部では、未だ狩猟漁撈の生活が相当残つていたのである。そのためか、東北地方で作られた弥生式土器では、相当縄文的な名残をとどめていて、縄文の地文のある弥生式土器が出土してゐて、一般に知られている弥生式土器とは違つた弥生式土器が残存している。種市町出土の弥生式土器も同様であ

は、日本文化の発達に新しい転機をもたらしたことは既に述べた。殊に金属器の使用は目新しいことであつた。この金属器の使用のうち特に鉄器の使用の普及は政治的に新しい事態を出現した。それは統一国家の成立である。

弥生時代に小地方的な統治力が成立した状態について、中国の文献（漢書、後漢書）は日本は百余国に分立しているとして記しているが、鉄による刀劍、甲冑などの武器、武具の発達によつて強大な軍勢力が形成され、小国分立の状態から統一国家の成立の方向へ進んで行つた。その時地方に成立したのが大和国家である。その頃各地方地方にも統一国家が形成されて行つたが、それらは後に次第に大和国家に支配統合されて行くことになつた。この強大な支配権力の成立を物語るものが古墳である。

古墳とは古代の強大な支配者を埋葬するために築いた高塚式の墳墓である。大和朝廷の古代の天皇の御陵は大きな古墳である。中でも応神天皇陵と仁徳天皇陵はその平面的規模においては世界最大の墳墓である。古墳は古代の天皇ばかりでなく、その国家における有力な豪族もそれに倣つて古墳を築いたから、今日大和地方をはじめ各地方に大きな古墳が存在する。

大和国家が成立した。この古墳の築造されるようになつた年代は何時かというところ、今から千七、八百年前頃と考えられている。従つて、考古学的に見ると千七、八百

年前頃が日本国家の起源になるが、これは今日の歴史の研究の上からいふと、妥当な年代と考えられている。二千六百年前は既に述べたように、日本書紀の時代に推定した年代であつて、その頃の日本は原始時代の狩猟採集の生活を営んでいた頃で、国家などというものが生れて来る時代ではなかつた。

この古墳を築造する習慣は大化改新の際「薄葬令」といふ、古墳の築造を禁ずる命令が出されるまで続いたが、辺境の地方ではその習慣が残り、奈良時代になつても築造しているところもあつたが、平安時代になると全くなくなつたと考えられる。この古墳の消滅は、仏教の傳來による寺院の建立が関係ある。即ち人々は死後の世界について、立派な墓を作つて安心することになり、寺院の建立によつて安心を求めることになり、その方面に力が注がれるようになったからである。

弥生文化の入つて来た東北地方にも、当然この古墳築造の風が伝わら、各地に古墳の築造が行なわれている。宮城県では長さ百七十米もの大きな古墳が築かれている。律令政府に抵抗する程の力をもつたエミシンの住んでいた岩手県にも古墳の築造が行なわれている。

岩手県の古墳は北上川流域地帯に多く、南の方から花泉町水井古墳、胆沢村南都田角塚古墳、金ヶ崎町西根古墳、江釣子村猫谷地古墳、五条丸古墳、花巻市熊野堂古墳、矢巾村蝦夷森古墳、盛岡市太田蝦夷森古墳、西根村

やその外の人々の間に、既に古墳を作るような習慣は全くなくなつていたし、彼等は仏寺の建立などに努力しても古墳のようなものは築造することは考えられない。また在来の蝦夷勢力その有力なものは、この新しい政府の力に屈服してしまつて、古墳を築造するより力を失つてしまつてた。

このように考えると、岩手県の古墳は、エミシと云われた人々の築造したものであることが明らかで、その中にさまざまな宝物が副葬されているところより考えると、蝦夷の中でも有力者が、このような古墳を築造して葬むられたものと考えられる。

三 土師器と農耕生活

古墳時代に使用されていた土器が土師器といわれる無文の素焼の土器である。この土師器は、岩手県の場合、前期と後期の二種に大別出来る。後期土師器については次の平安時代の項で述べるが、前期土師器はロクロを用

谷助平古墳、岩手町野島古墳など有名である。東北では金田一村に古墳のあつたところがある。その他、今はない。青森県三戸郡鹿島沢古墳がある。その他に古墳から出土する刀子が出土しているから、その他にも古墳が所在するかも知れないが、現在のところ明らかでない。

これらの古墳は角塚古墳が径三十米ほどでやや大きい

が、他の古墳は径十米、高さ一米内外の小円墳が主である

が、これら古墳からは鉄製の直刀、鍔手刀、小刀、鎌

などの外に、鉄の馬具や斧先、鍔先などが出土して

いる外、勾玉、管玉、切子玉、小玉、練玉などの装身具

も出土している。これらによつて古墳の築造された時代

には鉄器が普及して、鉄の刀劍が用いられ、農具などに

も鍔先など鉄が用いられている。そして、玉類の装身

具を見るとその文化程度も決して低いものでないことが

知られる。

このような文化程度を示す岩手県の古墳は誰れが築いたもので、何時頃のものであろうか。熊野堂古墳や西根古墳から和銅開珎が発見されている点から、和銅開珎が作られた後まで作られていたことは明らかである。従つて奈良時代に入つても作られたことはあるが、平安時代になつても作られたかどうか恐らく蝦夷が平定された以後は作られなかつたと断言出来る。

なぜならば、平安時代に律令政府から派遣された武將

いないで、輪積法で作つた土器で、土器の表面に刷毛目痕や窠痕などがあがり、文様はない土器である。器形は壺、甕、甑（コシキ）、皿、（鉢）の四種乃至五種の器形の土器が一組となつて出土することが多い。

この土師器は弥生式土器以後、農耕の普及発達と鉄器の使用と関係して、広く日本全国に行き亘つた土器である。農耕と米食の生活によつて、この土器の底部には穀痕のある土器が多いこと、コシキと称せられる土器が穀物を蒸すセイロの役割を果たした土器であることによつて知られる。むかし米は今のようによく炊いて食べるのではなく、蒸して干したホシイ（糲）として食べたのである。土師器は岩手県の古墳の作られていた時代に、そこに古墳の有る無しに拘わらず、広く行きわたつてゐる土器で、エミシと云われた人々の用いたものである。

この前期の土師器の存在は、平安時代以前に鉄器の使用と農耕の行なわれたことを物語るものである。種市町でもこの種の土師器が出土している。殊に横手地区の開田の際には、多数の土師器が出土して、そこに当時の集落のあとさえあつたことが考えられることは、開田当時の出土土器を採集しておいた佐々木剛一氏の談話によつて推定される。その他角ノ浜、大久保、中野の有家の向がれや黒マツカからも出土している外、城内にも出土してゐる。

城内の梅内氏の畑から出土した土師器は、甕土を採取

四 平安時代の種市 付角浜の千人塚

大化改新によつて新しい国家体制をつくりあげた日本の天皇制律令国家の東北経営は、その着手以来百五十年を経た弘仁年間文屋種麻呂によつて完遂された。その結果岩手県はエミシの支配から、律令国家の支配に入ることになつた。ここに岩手県の地域が日本国家の範囲に入ることになつたのである。

この東北の蝦夷征討は、野竊無智な蝦夷の支配から解放して、正しい良い政治を行つたという形で歴史は述べているが、征服といふことは、征服者にとっては聖戦という形で行なわれることは今も昔も変わらない。東北に住んでいた人々を無智野竊な異人種であるとしたのは、征服者の立場で書いた歴史であつて、征服された蝦夷の人々の声は書かれていない。当時東北殊に岩手県に住んでいた人々が、果して野竊無智な異人種であつたか、既に再三に亘つて述べて来た。

しかし、大和國家が国内を統一して日本國といつたのまゝをもちつた時期が、おそくとも五世紀初頭とすれば、九世紀の初め東北経営が完成するまで、四百年間東北地方の蝦夷はそれと対立する勢力として存在した。従つて、その征服後相互の融和を計るために、人民を相互に移住させたり、仏教による順化を目ざして寺院を建立したり、神社を建てたりした。しかし、岩手県の場合

するため畑の一部をけずり取つた時完全な壺が一個出土したので、それを城内小学校に持参したところ、長岡善一郎氏の目にとまり、早速今度の調査で現地に行つて調査したところ、破片となつていたがコシキ、甕、皿が採集され、土師器の一応のセットが得られたのは幸いであつた。これら種市町の土師器の出土は、いずれも偶然の発見で、しかもその土器を保存しておいたものが目に触れたに留まつてゐることが、これ以外に散いつてしまつたものも相当あることが考えられるとすれば相当広く行き亘つていたと考へてよい。それにつけても思ふことは、偶然の遺物の出土発見があつた場合、好奇心にしろそれを保存して、心ある人に見てもらふことが、その地の文化の解明に大きく役立つことであつて、いたすらに捨て去つてしまふのは残念なことである。

種市町にもこの種の土師器が多く出土しているといふことは、都を離れた僻遠の地にも、平安時代の蝦夷平定以前に、既に鉄器を使用して、農耕を営んでいた人々が住んでいたことを証明するもので、これが野竊無智な先住民と考えられていたエミシの実態であつた。そしてその土師器の出土する住居址を見ると、関東や畿内地方の一般農民の住居址と変らなない状態であることも明らかになつて来ているのである。

その重点は北上川流域地方に置かれたことは、和賀、禰賀、志波郡が設置されており、延喜式に記載されている神社も志賀理和氣神社（新妻町赤石）が北限であることによつても知られる。また平安前期の仏像も北上川流域地帯に多いこともこのような事実を物語る。

この新しい律令國家の支配が、東北地方にどう及んだかについては、既に述べた天台寺以外に立ち立つて云うものがなないのであるが、私は須恵器と後期土師器の存在に、その文化の進展を見たいと考へてゐる。

須恵器とは祝部式土器、陶質土器、朝鮮土器といわれたものである。その名称によつても明らかのように、在来の日本の土器と違つた特質のものである。それは土器を製作するのにロクロを使用していることと、焼き上げの場合に登り窯を用いて焼き上げていることである。従つて、ロクロを使用した痕跡が器面にあらわれており、焼き上りは堅緻で陶質化している。この土器は歴史の上では陶器と書いて「すえのうつわ」と呼んでいるが、後の陶器（と書い）と区別する意味で、須恵器と呼んでいる。

この須恵器は朝鮮の服属、中国との交渉などによつて、帰化人の陶工によつて日本で作られることになつたもので、その時期は四世紀末から五世紀初頭である。今から千五、六百年前である。この須恵器の製作は、従来の土師器にも影響を及ぼした。土師器の業焼きの点は窠む

らないが、それを製作するのにロクロを使用することになつたのである。須恵器の影響を受けた土師器はロクロ使用のあとが器面に現われている。この土師器を後期の土師器と呼ぶことにする。このロクロ使用の土師器が糸切底(図原字二〇)の器のものがある。そして須恵器が製作された時代になつても、日用にはこの後期の土師器が一掃に出土することが多いが、後期の土師器だけ出土することもある。

この須恵器は日本国内において、大和國家の勢力の伸展と共に普及し、各地で製作されたようである。大和國家の勢力の及ばない蝦夷地であつた岩手県の場合、この須恵器と後期の土師器の製作と普及は、平安時代になつてからであると考えられる。胆沢城址などにはこの須恵器と土師器が沢山発見されている。しかし、奈良時代に須恵器のような新しい土器は珍しいものであり、岩手県内で製作されなかつたものにして、既に宮城県では相當普及と製作されたものであれば、既に農耕や鉄器の製作などで相互の交渉があつたことが知られる関係において、軍事的な征服、支配という形を見ない以前においても、移入される機会が多かつたと考えられる。しかし、それも一般の民衆の生活に利用されたといふのでなく、蝦夷地の豪族に使用される宝物的な意味をもつたものであり。そのためか、古墳などから発見される例が多い。一般民衆の生活に入り利用されたのは、平安時代になつて

からである。なぜならば、前期土師器の住居址に須恵器の発見されるのは特殊の例であつて、殆んどない。それに対して、平安時代の住居址には後期土師器と須恵器が一掃に発見されるのが普通である。

以上のような状態で発見される須恵器や後期の土師器が当地方に発見されれば平安時代の開拓期頃に入り込んだ人々が住んでいた場所と考えたに違いないと思ふ。その須恵器が角浜で発見されている。(図原字二〇)この形の須恵器は野田中学校付近からも數個発見されてゐる。恐らくこれは蝦夷征討後に入り込んだ人々の文化を示すものである。

野田中学校付近の竪穴住居址の場合、そこには前期の土師器の住居址群もあり、その土器も出土している。須恵時代の住居を営んだ人が新しい文化を受け入れて住んだのか、蝦夷を放逐して後に律令國家の開拓民が入つて来たのか明らかでないが、平安時代の文化の浸透して来ていることは明らかである。角浜の場合も、付近に蝦夷地時代の前期土師器が出土する場所があるので、野田の場合と同様なることを云うことが出来、同じ農耕民として、當時は似たようなところを住居の遺地として住んでいたことが推測される。

角浜の千人塚

坂上田村麻呂が蝦夷征討の時殺した蝦夷の首を葬つた

塚とも云われている。第一章で述べたように坂上田村麻呂の蝦夷征討は北上川流域だけで、東北に及ばなかつたから、若し蝦夷征討の首塚とすれば文里總麻呂でなければならぬ。その点九戸郡誌に引用されている種市村誌は「最終の蝦夷征討たる弘仁二年夏秋の候、鎮守府副將軍、百濟の王教雲(兼者注 百濟王教雲は延暦年間坂上田村麻呂大將軍の時副將軍であり、弘仁二年文里總麻呂の時はその子である。)に擊破せられて此地に埋められたるに似たり」とあり、年代は良いとしても、人物に疑問がある。

考えて見るに、平安時代の蝦夷征討の時代に、この種市地区の各地に蝦夷の集落のようなのがあつたことは、前期土師器の出土によつて知られるが、律令政府の軍事力に対抗する程の統制と軍事力をもつていたかは疑問である。なぜなら古墳のような豪族の墳墓が存在していない。そうすると千人塚が築かれるような条件は余り考えられない。しかし、この塚のようなものが何であるにしろ、これを千人塚と呼ぶ土地の人々の意識に、自分たちが新しく来た日本人だとする自尊心と古い野蠻な蝦夷のな要素を一掃して埋没させてしまいたい意識がはたらいていることが考えられる。蝦夷が日本人とは異質な野蠻人と考えられている段階で、日本国内に住む日本人が同質な同胞としての一体感をもつために、古い異質な存在が亡ぼされて一掃されたというように考えるのは当然であり、それだけの意味をもつていた。しかし、律令政府

が東北の蝦夷征討において、蝦夷地の反抗する軍事力を討ち破られたが、その住民を一掃したとは考えられないし、事実それは順化している。そうすると律令政府の支配は新しい要素を注入することになつたが、在来のものでその根底に存在したことは否定出来ない。蝦夷的な要素は強く東北地方の人々に強くうけつがれて来ていると考ふる。したがつて、東北人には蝦夷の血がこいと云える。しかし、既に述べたようにその蝦夷は日本人とどう差異があるかは別問題であり、またその文化も決して未開劣等人と一概に蔑視される内容でなかつたことは、再三に亘つて述べた通りである。

以上の考察に基づいて、千人塚といわれる十六平方メートルの高さ一米たらずの土盛りが、何であるか、純粋に学問的に追求されなければならないと考ふる。

五 安倍・藤原時代の種市

平安時代の中頃、律令政治が次第に弛ゆるみ、政治が藤原氏の貴族に左右される頃になると、中央政府の辺境地方の経営の手も弛ゆるんできた。この時に乘じて、強大な地方権力を築き上げて、朝廷に反抗したのが安倍氏である。安倍氏は野川橋を本拠として奥六郡を支配して強勢を誇つた。六郡は胆沢、和賀、江刺、稗貫、志波、岩手であるから、衣園を関門として、その北の北上川流域地域であつた。従つて野川橋に次ぐ根拠地島海橋(兼任の居

城)は金ヶ崎町の島海橋築定地で、二戸郡の島海村ではないと考える。その頃、奥北一円がどうなつていたかは、これを知る資料が全くない。平安時代のはじめに住み付いた人々が細々ながら生活していて、中央政府も安倍氏も特にこれら顧みること少なかったと考えられる。

その後、藤原清衡とその子孫三代に亘る支配が続いた。藤原氏はその本拠を五里に置いたことは奥南方面の経営に力が注がれ、奥北は益々顧みられなかつた。しかしその支配は奥北にも及んで来たのであることは、藤原氏は

第四章 中世の種市

一 鎌倉時代の種市

平泉の文化の華やかさに比べて、中世の武家文化は余り精彩がないように考えられるが、地方の開発や地方の庶民文化を主として考えるとき、果してそうであるだろうか。平泉の文化の華やかさは藤原氏一門に限られた文化であつて、民衆の生活や文化と何等の關係もなく、却つてその華やかな文化を支える土台であり、犠牲者であつた。その表面の一部の文化が華やかであればある程、多数のものが犠牲とされて来た。

それに対して、武士の文化は地方を自分の支えとして、その地方の育成に努めた。平安時代の貴族は、地方民の

平安時代以上に民衆の経済力の伸張が認められる。奥州の広大な土地とその民衆の力が、その存在の価値と重要な意義を認められ、その力を發揮したのは中世である。この時代は都と地方との差別がなく、その地方地方のもつ力がそれだけで重要な意義をもち、他と対当の役割を果たした。中央集権の時代は都が中心で、地方は辺境として顧視されないが、地方の力を尊重する時代においては、僻地は存在しない。原始時代に奥州が重要な役割を果たしたように、中世も奥州は重要な役割をもち、その独自の存在意義を果たした。上代において奥州の産金が重視されたが、それは中央に隷属する形で利用されただけであつて、そのことが奥州の文化の向上とは關係がなかつた。

奥州が鎌倉の武家時代に重要な意味をもつたのは、馬である。武士はその生活において馬を必要とした。奥州は古来から馬の産地として知られていた。鎌倉武士もその優れた軍馬を奥州に求めた。宇治川の先陣争いもその優れた馬「青海波」は三戸立、能谷直実の「権太栗毛」は一戸立と云われる。従つて、奥州の藤原氏没後、幕府は奥州の経営に重大な関心をもつた。

文治五年平泉の藤原氏の滅亡によつて、奥州が鎌倉幕府の支配下に入ると、他の諸國のように守護を置かず、奥州惣奉行を置いて、武士の取締りに当たらせ、葛西清

北海道のアイヌとも交渉をもつたことによつて知られる。それは年貢として馬や金、米などの徴収があつたろうが、この地方に文化的施策を行つたこととはなかつた。特に京都の藤原氏の文化を模倣しようとした奥州の藤原氏は、北上川流域から更にその北方の資源を一手に掌握し、平泉にその文化の粋を集中して、驚くべき優れた文化財を築き上げたが、一面地方はそのために犠牲とされたことが、安倍、藤原両時代を通じて、見るべき痕跡を地方に残さないといふ結果をもたらしたとさえ考えられる。

苦しみを知らずに、自己の快楽にふけつていた。平泉の藤原氏も本来は地方の民衆を支えとして勢力を確立したにも拘わらず、民衆の生活を忘れて、都の貴族の生活を模倣し、逸楽にふけつて亡んだ。朝朝が武権を掌握したにも拘わらず鎌倉に本拠を重いたのは、政治を武士本来の地方民衆の生活を忘れず、質実剛健の風風を保持せんためであつた。このような結果、鎌倉時代の文化には貴族のな華やかさはないが、民衆の力が強く伸張して来ることになつた。民衆の力に支えられた文化は、如何なる強権の圧迫に対して、敢然と争ひ、その勢力を伸張させて来ていることは、新しい宗派である浄土宗、真宗、日蓮宗などに見ることが出来る。経済的な面においても、

重をその職に任じた。また行政訴訟などの事については陸奥国留守職を置き、伊沢家景を任じた。そして藤原氏の支配地を夫々有功の武士に恩給したので、多くの鎌倉武士の所領が成立し、関東の武士が下向して、その地の経営に當つた。その結果奥州北部の地方にも多くの鎌倉武士が下向することになつた。そして糠部郡(今かか)が成立することになつた。

糠部郡は岩手郡、閉伊郡以北の地方を総括して呼ぶ名称であるが、この地方が糠部郡として郡名がつけられたのは鎌倉時代になつてからである。糠部五郡と云うことが「南部根元記」などに書いてあるが、糠部郡は一部としての名称で、これが文祿慶長の頃に二戸郡、三戸郡、九戸郡、北郡などに分れるが、それまでは、分れた名称の郡名はなかつた。

(糠部郡を岩手郡、閉伊郡、鹿角、津軽などを合せて考えている説もあるが何等根拠がない。そもそも五郡という言葉が意味がないのである。)

このより広大な面積の糠部郡は、鎌倉時代において馬産地として重要な土地であつたので、鎌倉武士にとつて関心の強いところであつた。南部氏の外、工藤、結城、北条、二階堂、横溝、会田、畠山などの鎌倉武士の所領が成立した。この外在来の土豪安藤氏の所領もあつた。

「南部根元記」によれば、糠部郡を南部光行が拝領し、その一門に一戸、三戸、四戸、七戸、九戸、東、北氏な

どが分れて、各地を支配したより述べているが、南部氏が鎌部郡全部を押領したと考えられぬし、また七士のようなことは無かつたであらう。恐らく多くの鎌倉武士の所領に分割されたが事実で、前述の各氏はその一部であつて、未だ歴史に残らない人の名前もあつたと考えられる。

この広大な鎌部郡は東西南北の四地区に分け、その各地区にそれぞれ牧場があり、それを一の部分から九の部分に分れていた。これが四門九戸の制である。一つの部に七つの村が所在し、六十三カ村があつた。東門には八戸、九戸が属していたから、種市は東門の九戸に属する土地であつた。

正安三年（西暦一三〇三年）の安藤三郎基直女家旗申状に「ひかしのかたねの一のもしきと四郎（筆者注東の門種市の目可鬼藤四郎）」とあるのは、種市が東門に属することを物語っている。なお種市の目可とある役名は公の役への感じが強い。そうすると種市は九戸の中でも、公田が多く園司の支配地になつていたので、目可が置かれたとも考えられる。この奥州北部地方は未開拓の地のようによく考えられるが、南部家文書の「氏名不詳入道地注文」と見ると、公田が半分を占めてゐる。これにより考えると、この地方に平安時代以来園衛領があり、藤原氏時代にもそれは朝廷の支配地として、園衛の留守所の支配になつてゐた。頼朝は奥州を制圧したとき、藤

原氏の所領は之を没収して有功の將士に恩給したが、留守所の支配地はそのまま先例によつて、その支配にまかせたのである。種市はそのような公田の一つであつたと考えられる。鬼頭氏はその役人の一人であつたと考えられる。

二 南北朝時代

鎌倉幕府の滅亡によつて、建武中興の政治が行なわれると、奥州は関東武士の勢力の根拠地として重要視された。保暦間配に「東國ノ武士、多ク出羽、陸奥ノ領メ、其ノ力モアリ」とか「彼ノ兩國ノ日本半園ナンド申田ナレバ」とあり。従つて、後醍醐天皇は、関東に成良親皇を派遣されると同時に、義良親王（後の後村上天皇）を北高麗家を陸奥守に任じて派遣せられた。親王の奥州下向は史上はじめてのことであつた。

頼家は宮城県多賀城の園府に入つて、諸政を行つたために、奥羽評定衆、引付衆、諸奉行を置いて、園府の役人や武士をその職に任じた。その結果、「東國ノ武士多ハ奥州へ下ル間、古ノ関東ノ面影モ無リケリ」といわれる程の情勢となつた。頼家は奥州北部の鎌部地方は園府から遠隔であつたので、南部節行を園代（園司の代理者）として、諸政を執行させたのである。この節行の園代任命は、南部氏が鎌部地方をその後制任する契機になつたと思つた。それまで南部氏は甲斐園南部庄を根拠地とする鎌倉武士

で、平泉藤原氏滅亡後他の鎌倉武士と共に鎌部郡内の一部の所領を恩給されたが、その本拠は依然甲斐園にあつた。一族の者を鎌部に派遣して、その所領の経営に当たらせたと考えられる。ことに頼家に依頼された鎌部地方の園代とされ、その後の戦乱は南部氏がこの地に定着させることになつたと考えられる。

建武中興の政治は、足利尊氏の武家政治再興の謀叛によつてくずれた。奥羽にあつた頼家は尊氏の謀叛を聞くや、義良親王を奉じて西上し、尊氏を撃破してこれを九州に出奔させた。奥州軍がその実力を發揮した戦であつた。頼家は再び親王を奉じて、多賀城にもどり、奥州地方の経営に努力した。

九州に奔つた尊氏は、着々勢力を回復して再び、京都進入の機をねらう一方、奥州の武士を自分に手につける運動を行つた。尊氏は機熟して九州より東上を企て、湊川で楠正成を敗死させ、新田義貞を北陸に走らせて、京都を占領した。この頃奥州も尊氏に味方するもの漸く多く、頼家は多賀の園府を維持出来ず、福島の靈山に拠つてゐた。後醍醐天皇は京都の危急を打開するため奥州から再び頼家を招いて、尊氏と一戦せしめたが、頼家は石津の戦に敗北し、南部節行もこの戦で討死した。

後醍醐天皇は、その後奥州の経営に期待するところがあり、再び義良親王に頼家の父親房をつけて下したが、途中嵐に遭ひ親王の下向は実現しなかつたが、親房は関

東につき、小田、関、大宝などの諸城により、奥州には頼家の弟頭領を遣わつて、その勢力の回復に当らせた。北奥鎌部地方では南部氏の一族が節行の志をうけつて、五代に亘つて一貫して南朝の味方として立方と争つて、一歩も譲るところがなかつた。そのことが南北朝の和会、室町幕府の無力化と共に、この地方が南部氏の支配地としての頃の様子を物語る結果となつた。

この頃の種市の情況を物語る資料は何も残つていない。ただこの頃久慈郡と云ふ名称が南部家文書に出て来る。久慈が郡名と呼ばれたのはこの文書だけで、如何なる事情で久慈郡が成立したか知らぬが、鎌部郡東門の中、久慈地方が独立して考へられた程の事情が発生した。その中に結城氏の所領があつたことから考えれば、鎌部地方一円を南部節行の管轄下としたことから、久慈を結城氏の所領として独立して取扱つた一時的な処置かも知れない。しかし一面久慈が一郡として取扱われるだけの所領として内容をもつてゐたとも考えられる。その久慈郡は恐らく野田、久慈地方を含んでゐたであろう。文化の上から見ると、久慈の長楽寺の薬師立像は当時の作であることを考えると、当時久慈地方に相当の有力者のいたことも考えられる。

三 室町時代の種市

南北朝期の合一によつて五十年に亘る戦乱もかさま

り、一方足利氏は豪族山名氏をおさえ、室町に新邸を築いて幕政を行なうなど、幕府の權威は高まり、その勢力も伸張したかに見えたが、関東地方は足利氏の一族の関東管領の支配下にあつて、幕府の命令は行なわれず、独立して幕府に対抗する形勢を呈していた。その関東管領の勢力も北奥の鹽部地方には充分及ばず、各豪族のばつこにまかされて来た。この間に乘じて、南部氏が急激にこの地方に勢力を伸して行つた。

南部氏がこの地方の諸豪族をその支配下に入れて、その勢力を発展させて行くと、諸豪族を結婚政策などによつて一門一族として同族のな体制に組み入れて行き、その支配体制を固めて行つたと考えられる。それが後に、南部一族として、主家から分つて行つたように考えられたが、恐らく血縁關係によつて同族意識を深め、その支配体制を形成したものと考える。その勢力は秋田県の鹿角郡や津軽地方にも伸張して行つた。その結果、後に独立して原原氏の後裔と稱した津輕侯大浦氏も、一時は南部氏を稱した時期もあつた。

この南部氏が鹽部郡を制圧して行つた際、その中心となつた南部氏が三戸に本拠を置いた南部氏が、八戸に本拠を置いた南部氏かについてそれを明確にして、史料がない。「南部根元記」や「八戸家伝記」によつて推察すると、南北朝時代に鹽部地方に所領をもつていた南部氏が、既に二派に分れて争つて来た。それは即行の系統のち種市氏は北氏からの分れて、北氏は南部信義の子孫とされている。しかし「参考諸家系譜」の種市氏の条を見ても、北信愛(重胤) 重胤を立て、九戸政実と争つて、盛岡(南郡)をもち立てた立役者であり、花巻城を与えられて伊達氏の勢力侵入を防いだ初臣の言葉として、「汝ノ子孫繁榮ナラバ北ノ力ヲ以テ氏トシ、割愛ヲ以テ紋トナスベシ、若子孫衰ハバ、種市ヲトシ、木瓜ニ引電ヲ放トナスベシ、種市ハ我家ノ本名ニシテ本工藤氏藤原姓也」とある。このように云々伝え、南部氏の一族として、重要な働きをした北氏と見え、異姓の出身であることを物語つていて、種市氏はその分れというより、種市氏がもつて、その分れに南部の重臣北氏があつたこととなる。

種市城は南部領内の糠部郡内の二十二城(三戸城、八戸城、久慈城、野田城など)の一つに数えられた山城であることを考えると、糠部郡内において相当重要な城であつた。従つて、南部領直が秀吉から南部領十郡を拝領すると、領内統一の実を挙げ、戦国乱世の豪族の割拠の風を除去するために、その城の破却を命じ、三戸城下に参集させることにした。これより前、九戸政実の飯乱の際には、信直に味方したので、その所領を安堵せられていたが、天正二十年、一家士として、城下において五〇〇石を拝領する武士となり、その本拠種市とのつながりを失うことになつたのである。

種市氏は、その後慶長六年岩崎一揆の際には七百石とし

南北朝に味方した南部氏と、三戸に居た足利氏に味方した南部氏である。南北朝の合一は足利方の勝利という形で終了したことは、三戸南部氏の立場を有利にした上、當時守行が出て、大いにその勢力を伸張したが、宗家のとして地位を確保することになつたのではないかと考えられる。

鎌倉時代公領と考えられる種市も、南北朝から室町戦国時代に相続く戦乱は、武士の自由な略奪にまかせられ、形式的な公領は武士の占有地となつて行つた。その領主はじめは鬼藤氏であつたが、何時の頃から種市氏に代つていつた。目代の鬼藤氏が土地に土着した結果種市氏を称したのか、新たに種市氏が起つて鬼藤氏に代つたものであるかは明らかでない。

種市氏は戦国時代自己防禦のために城をつくつた。それが種市城(城内に西風館七の塔)である。当時の城は、他の地方でもそうであるように、山城であつて、山を利用して周囲に空濠を周らしてあつた。これは平時居を構えていたのではなく、外敵が侵入して来な時に於て難つて防衛する逃げ城であつた。従つて不便なところにあつて外敵を防ぐによい条件のところにあつた。平時は平地に居を構えて農業を営んでいるがその生活であつた。この種市氏も南部氏の勢力の伸張に際しては、その軍門に下り、その地位を保つたと考えられる。その結果、種市氏も南部一門として名を連ねることになつた。即

て出陣しているが、間もなく罪ありて祿を没収されてい

後 篇

種市町内諸遺跡の調査報告

ま え が き

本調査報告は昭和三十六年四月二十八日から五月一日までの四日間、種市町の一部遺跡の調査の報告が主であるが、その調査は後に述べるように、相当の成果はあつたが、遺跡の概況の一部を調査した程度の内容であつた。しかも、この調査を実施するに至るまでに、地元の好字の方々の努力と関心とによつて明らかにされたところに基づいて実施されたものであり、またその後も地元の人

第一章 調査前の記録

筆者が種市町に實際に足をを入れて調査する前に、種市町内の考古学的遺物遺跡について記述した主なものに、「九戸郡誌」がある。「九戸郡誌」の種市町に属する部分を用いると、

戸類家について、「本郡内に於ける遺物包含地として有名なるは、種市村戸類家の田ノ沢（密田マシヤシ）及び江刈村字五日市等である。前者は山麓の傾斜した畑地、二三尺を発掘して数多の完全なる土器が発見せられ、なお附近の地下に包含せられるものと思料される。その附近の耕地一面には多くの土器破片が散布している。」とあり、戸類家出土土器として、小鉢形の縄文晩期の土器

々によつて明らかにされた諸遺跡も多くあるので、この機会に町内の諸遺跡の状況を明らかにされた範囲で述べ調査を担当した責任ある部分について、知り得た範囲で要点を述べたいと思ひ。従つて、昭和三十六年度の調査の報告を主体とするが、地元の方々の報告もこの際允許を得て併記することにした。整理編輯その他内容についても責任は筆者にあると考えている。

が掲載されている。

八木の具塚について、「本郡内には著大な具塚を見ないが、種市村八木港附近、及び野田村大字玉川字根井等には二三指摘することが出来る。前者は家屋建築の際、断崖に発見されたと云われ」と、記してある。これについては後に述べる。

住居址では、「本郡内に於ける竅穴は晴山村大字晴山上野場及び中野村等に発見されて居り、何れも群をなしている。」とあるが、中野村の場合、群をなしている竅穴住居址とは、どこにあるものを指しているのか、現在は明らかでない。

そのおわりに、郡内の「石器時代遺物発見地一覧」を載せている。これは東京大学理学部人類学教室編の「日本石器時代遺物発見地名表」より抜録し、それに郡内小学校長の報告を加えたものである。それによつて種市町に分を掲げると次のようである。

第二表 種市町内石器時代遺物発見地名表(九戸郡誌より)

町村	発見地名	種	類
中野村	小子内 平	土器	石鏃 石斧
種市村	字八木 字戸畑家及小山 字宿戸及船渡	土器 土器 土器	石匙 石斧 角器 獣角肉
同和庄		土器	石斧
同和庄		土器	石斧

その後、考古学的遺物遺跡の記述を行つたのを知らないが、筆者が昭和二十八年「考古学提要—岩手県を主とする」を出版したとき、「岩手県先史原史時代遺物出土地名表」を記録として出版したが、当時種市町の實際を知らなかつたので、前の東京大学の地名表と盛岡市で知り得られた資料に基づいて、次のように作製した。

第三表 種市町内石器時代遺物発見地名表(昭和二十八年)

町村	出土地名	出土遺物	報告者名
中野村	中野	土器、石器	小田島謙郎
種市村	小子内 平 長坂 八木(貝塚) 戸畑家宿平 小山	土器 石器 土器 石器 土器 石器 土器 石器 土器 石器	同右 同右 同右 同右
種市村	船渡	土器 石器	佐川盛三
同和庄		土器 石器	同右
同和庄		土器 石器	藤原三治
同和庄		土器 石器	同右

この地名表作製の際は、種市町内分については現物を見なかつたが、この頃地元には中野小学校校長佐々木剛一氏や玉沢重作氏などの研究者がいて、實際に遺物を蒐集保管していることが、昭和三十年の才一回調査によつて知ることが出来、以後急速に種市町内の事情が明らかになり、この報告を記述するまでに至つたのである。しかし、未だ知られずに残つている分も相当多いことが考えられるが、次の機会にゆづり、今日まで明らかにし得たところを報告することにす。

第二章 調査の経過

第一回調査(昭和三十年十月二十一日、二十二日)

種市町の遺物遺跡を調査したい希望を早くからもつていたが、實際にその機会に恵まれなかつた。昭和三十年十月下旬久慈市出張の機会が与えられた。その時歴史学に関心をもつておられた佐々木剛一氏(当時種市中学校長)を知る機会を得、その好意ある案内で、同町内の遺物や遺跡を二日間亘つて調査し、更に八木に住む考古学研究者の玉沢重作氏を紹介され、その蒐集遺物を調査した。その内容の詳細については、岩手史学研究二十三号に報告しているので一部は略すが、遺物では、佐々木剛一氏、平内小学校、種市小学校、玉沢重作所蔵のものを見学調査し、遺跡ではゴツツク、穴けの子、横手、大久保の諸遺跡を踏査した。この調査によつて学び得た收穫は私にとつて大きいものであつた。この当時の教育長は中野次男氏で、種々便宜を与えられたことを記して、上記の個人に併せて謝意を表す。

第二回調査(昭和三十三年十二月十日)

その後、佐々木剛一校長が種市中学より中野小学校校長に転じられ、附近を踏査して新しい遺物散布地を発見したとの報告があつたので、昭和三十三年十月また久慈市出張の機、佐々木氏の宅に一晚世話になり、その蒐集

品を見学調査し、学校附近の遺跡を案内されて踏査した。案内された遺跡は、海岸近くの丘陵台地で、大手中野の俗称大宮と云われているところで、縄文早期の土器片が地表面に相当多く散布し、石鏃も採集されることと見られ、岩手県では表面に散布しては一番多いところと見られた。なおその丘陵を内陸側に下りて来た付近には弥生式土器が表面から採集された。この付近一帯は今後調査をすべし重要な遺跡と考へられた。

今一つの遺跡は小学校から北の方向一軒の地点にある丘陵傾斜面の遺跡で、大字有家俗称「上のマツカ」と云われているところである。ここは丘陵傾斜面の畑に相当多数の土器片が散布していた。時期は円筒下層の前期と見られるものであつた。早急に調査を必要とする場所と考へられた。なお、「上のマツカ」へ行く途中、俗称「向ながれ」といふ場所で、最近住宅建築の際に出土したという土師器の繩と鉢を見学した。

この踏査の際は佐々木校長と一緒に、岩手大学の日本史を専攻して小学校に勤務していた重茂輝子教諭にも同行を願つて、案内をいただいたことを記し、謝意を表す。

第三回調査(昭和三十六年四月二十八日、五月一日四日間)

この調査が本調査で、今までの調査はこの調査を実施するまでの経過と云える。この調査を実施するに至つたのは、昭和二十八年福岡町爾靈体担野遺跡調査以来、筆者の關係した調査に何かと協力を得ていた長岡善一郎氏が、福岡高校より久慈高校種市分校主任として、昭和三十五年に種市町に住むことになつたことに依り得る。長岡氏は種市分校に在任中、是非種市町の古い時代の歴史を解明したいと念願し、町内の遺跡調査を計画した。そして筆者に協力を求められたので、その手続万端を依頼し、昭和三十六年四月末から五月初めにかけて実施するに至つたのが、才三回目の調査となつたのである。

この調査では、町内の重要と思われる遺跡を一通り踏査して、その遺跡の状況の概略を明らかにしてしまつたというので、土器片その他の遺物が多数発見されてくる遺跡を踏査し、その遺跡の状況を明らかにすることにした。従つて、一箇所の調査を精密にするというのではなく、遺物の包含層の状況調査という程度に留まつた。

四月二十八日 ヨソウ地区

四月二十九日 城内地区の器台出土地と土師器出土地、旭野の彌文遺物包含地

四月三十日 中野公園、午前大宮地区、午後有家地区

五月一日午前 高野彌文遺物包含地
という経過で、本調査を終了した。

この調査は長岡善一郎氏が主催し、筆者が調査を担当

遺物で調査したのは、小子内の川崎浩吉氏、八木の玉沢重作氏、町長館石基治氏、中野小学校長佐々木剛一氏、角浜小学校、佐々木綱吉氏、佐々木六郎氏などの所蔵品である。なか角浜小学校長佐々木利男氏は種々御世話をお願いした。この調査を計画し、あつてんに御努力を願つたのは長岡善一郎氏であつて、その御尽力に厚く感謝する次第である。

以上筆者が才三回の本調査を中心に調査して来た経過の概要を述べたが、本報告書には筆者の調査してない遺跡の調査も記述することになつたのでその主なものを挙げるゝ次の二つである。

その他の調査（その一）（昭和三十六年八月十二日）

昭和三十六年度に、文部省後援果教委員会主催で実施した、果内遺跡調査カードの作成による現状調査である。種市町調査員に佐々木剛一、重茂輝子、山嵐洋子の

したので、学生三上清治、小針繁、菅原男一の三君を引率して協力者としたが、種市町には岩手大学日本史専攻として卒業した金沢光孝（種市小教諭）、近藤宗光（平内中教諭）、重茂輝子（中野小教諭）の三氏の他に、山嵐洋子（中野小教諭）、板垣宗六（大和小教諭）が勤務していたので、その協力を得た。また中野小学校校長佐々木剛一氏には何かと御協力援助を受け外、久慈高校種市分校の職員、生徒には大変な協力を受け、短日時の調査であつたが、調査した範囲では、一応その遺跡の概要を知ることが出来たのは幸ひであつたことを思い、以上各氏の御協力御援助に深甚の謝意を表する。なか種市町長館石基治氏には特に種々の御配慮をいただいたことに感謝する。

かわりに、この調査は初め昭和三十五年十一月に予定

して計画を進めたが、天候その他で実施困難となり、雪融けをまつて四月下旬に実施したので、手続その他若干

齟齬したところがあつたが、関係者に御迷惑をお掛けしたことも多く、大変遺憾であつたが、調査の結果を明らかにして御了承を乞ひたいと思ふ。

第四回調査（昭和三十八年三月十一日十三日）

才三回の本調査の整理のための調査である。殊に才三回の調査の報告を機会に、町内の遺物、遺跡全般に亘つて記述するといつて、前に撮影した写真の不備を補つたり、未だ見てない遺物を一応調査して置く必要をもち、三日間を予定して調査した。

三氏が委嘱された。この調査の報告は、果教委から出版される予定であるが、調査員の了解を得て一部を掲載させてもらうことにした。

その他の調査（その二）

玉沢重作氏、長岡善一郎氏、細越紀平氏などの踏査に上るものである。玉沢氏は八木に住み、現在八戸市の職場に通勤しているので余り蒐集してないが、十数年前八木を中心とした付近の遺跡を踏査し、表面採集で得た多数の貴重な資料を所蔵保管している。細越氏は角浜中学に勤務し、学区内で出土した遺物を学校に保管整理している。長岡氏は着任以来その方面の関心を示し、町内の遺物所蔵者の学校を訪ね、遺物とその出土地について聴取したものである。

第三章 第三回調査遺跡の概況と出土遺物

一 ヨソウ遺跡 ④は前4表遺跡名の番号以下同じ

概況

本遺跡は種市駅より国道を一軒ほど南下したところの右手に見える標高五十米ほどの丘陵にある。その丘陵の頂上近く、海に面した東傾斜面に位置し、種市町才十八地割三十四番地三十五番地付近の畑で、通称「ヨソウ」

といわれている。土器片や石器などが散布している範囲は約二十アールで、現在雑穀が栽培されている。（図版

第七の四）地主は高城要吉氏、板垣千松氏である。

ボーリングによつて遺物の包含状態を調査したところでは、余り良好とは云えず、黒土の堆積層も余り厚くない。調査はボーリングによつて若干手答ある箇所を選び

二米に五米の範囲で二か所調査することにした。

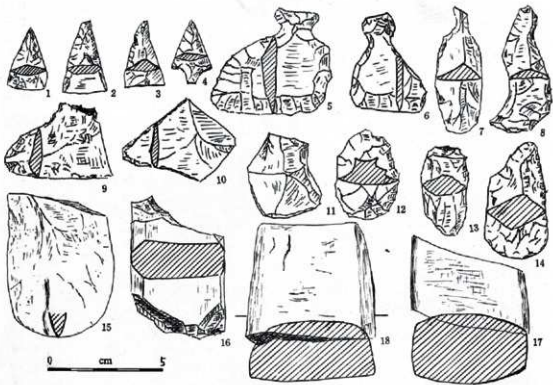
表土を二十厘米の厚さで除去すると遺物包含層に当たり、土器は耕作のため相当破壊されていることが明らかとなり、立つた状態で埋藏されていたものは上半分が欠き取られ、器口が下伏つている土器は底部が欠き取られていた状態であった。(図版第七の4圖)

幸い横倒しになつてはいたものは、厭し潰されて壊れてはいるが、大体の器形が復原出来る状態で、破片のそろつているものもあつた。(図版第七の8圖) しかし、全部の破片のそろつているものはなく、相当まとまりのあるような状態のものでも、底部がなかつたり、口辺部がなくなつていたり、復原は容易でなかつた。しかし、どうにか復原出来るもの三個を数えることが出来た。(図版第一の8圖)

地表面から地盤のローム層までは三十一四十厘米程で、包含層に層位の状態を認めることが出来なかつた。従つて表面採集の土器とローム層上から発見された土器片も區別出来ない内容のものであつた。包含層が浅いので、殆んどが耕作のため破壊され、地表面に散布したもので、たまたま耕作の關係上土の中に深く入つてはいたものが下から発見されたという状態であつた。

出土遺物

採集された土器は、弥生式土器と思われる捺捺を押し出した土器片三片と、土器らしい刷毛目のある一小片と、



第1圖 ボツツク遺跡出土石器類(1)

1~4 石鏃; 5~7 A類石鏃; 8~14 B類石鏃; 15~17 石棒; 18 石刀

貝殻のある縄文早期の一小片を除いて、繊維を含んだ縄文前期の土器である。各土器の出土状態の層位關係は判然とせず、いずれも混在の状態に出た。尤だ弥生式土器、土器類、貝殻土器はいずれも表面採集として、縄文のある土器の器形はいずれも円筒形を基本として、胴部が口頸部に幾分ふくらみのあるものもあるが、大体は口辺から底部に向つて直線的に幾分狭まつた器形をしていて、文様の上から三種類に分類出来る。

才一類は口辺部より底部まで単一な縄文の施文のあるものである。(図版第三の3圖左上段の二片) 図版才一の8はその復原した土器である。

才二類は口頸部に口縁に平行に帯状の文様帯が横位に施文されていて、その下には単一の縄文が施文されているものである。口頸部の文様帯は捺捺の押し出した捺捺文を主としたものが多い。(図版第三の4圖)

才三類は才二類の口頸部の文様帯と胴部の縄文部の界の頸部に粘土紐をはりつけた隆起線が一条口縁に平行して周らされているものである。隆起線には縄文または刻み目の施されたものもある。(図版第三の5圖下段二片)

その中右側の破片是一片しか発見されていないが、口頸部と胴部は共に斜行縄文だけで差異がなく、裏面に縄文が施されている。

以上三種の縄文式土器の中一番多いのは才二類土器で、それを見ると、口縁部に篋状のもので刻み目を施したもので、また余り目立ないが波状をなし、その尖端に刻み目を施したものである。しかし、この三種の土器は層位的に區別されるものでなく、全く混在して出土した。同時に作られたものとして一括し得るものである。底部は上げ底が多く、器体に繊維を含有している点などと併せて考へて、縄文前期の初めのもので、円筒下層A式とされる土器で採集され、また過去に採集されている土器も以上の三種の縄文式土器であるが、はじめにあげた弥生式土器・土器類がどうして混入したかは明らかでない。その類似破片の数が余り少ないから、表面採集によつて得られたことだけを報告して、遺跡としては、今後の調査に期待することにした。

今度の調査によつて採集された土器は、表面採集を併せて、二十三点である。種類別にいうと、石鏃四点・石鏃(石皮はぎを含む)十点、石斧六点、石棒二点、異形石器一点である。(図版第四の1圖・2圖)

(捺捺第一圖版第四の1圖、捺捺第二圖版第五の3圖の石器の実測図であるので、以下捺図によつて説明するが、図版は遠近参照されたもの)。

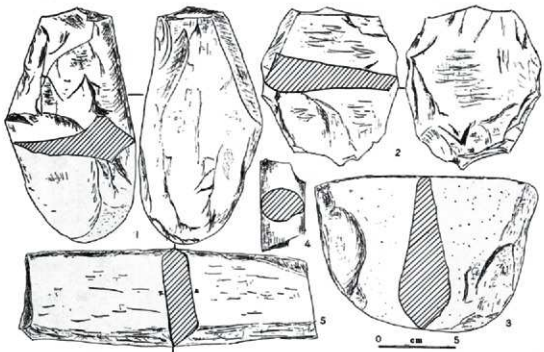
石鏃(捺図第一圖の1~4) 無莖三点、有莖一点である。石鏃(捺図第一圖の5~14) 石鏃は石匙といわれたものであるが、それは皮刺ぎの用を果したと思われる点か

ら石匕の字をあてるのが適當と思われる。石匕は普通撥みのあるものを称しているが、撥みがなくとも皮剥ぎの用に用いられたと考えられるものを一括して石匕と称して、そのうち撥みのあるものをA類とし、ないものをB類と呼んで、区別したいと思ふ。

A類(517)は横形と縦形があるが、横形一点で、縦形二点で三点であるが、B類(514)は七点で多く、その形もさまざまである。これはその利用価値から皮剥ぎとだけ称するのでも一方法であるが、余り適当とも思われない。

石斧(挿図第一回15、17、第二回15、18)は六点であるが、磨製石斧と打製石斧に大きく区別される。磨製石斧は完形品はないが普通の大きさで、うち一つは擦切磨製石斧の形をしている。打製石斧は磨製石斧に比べて大形で、粗雑な打製によつて一応の形を整えてあるに過ぎない。それも二種に分れ縦形の普通の石斧の形に近いものと、横刃形と称しているものがある。

横刃形石斧とは筆者の命名したものであるが、石包丁の最初の工程で作られような形をした粗雑な石器で、彎曲部に刃が付けられている。今まで縄文前期末の遺跡や中期初頭の遺跡ではしばしば発見し、その報告もしているが、前期初頭の遺跡では発見したのが初めてである。大体前期初めから中期初頭の円筒式土器の出土している遺跡に発見されている特有の石器である。



第2図 ゴツウ遺跡出土石器類(9)

1. 2 打製石斧 ; 3 横刃形石斧 ; 4 石射 ; 5 石射(石射鏃片か)

石棒(挿図第三回4・5)と称した一点は石棒の中尖部の一破片であるが、今一つは扁平な細長い矩形の破片(515)で、一応石棒にしたが、石刀状になつたものが、ただ鋭くないのなにか明らかでない。石棒は砂岩でやわらかく、角はいずれも削られてゐる。

板状石器(挿図第一回18)と称したのは、四角な平丸い石器の破片で、その原形は明らかでないが、断面は台形より形をしている。上下の両面は平らに磨りへらされてゐる。

まとめ

以上の調査の結果から推定される本遺跡は、縄文前期の遺物を埋蔵する遺物包含地として豊富な内容をもつている重要な遺跡である。しかし、その傾斜面の地形に立地すること、僅かな範囲の調査であるが、包含層が浅いところにあることなどから、焼土の堆積位は今後発見されるかも知れないが、住居址の輪郭を示すような遺構が発見されることは困難と考えられた。勿論、これだけの諸遺物の発見された本遺跡が、当時の住居址であつたと考えられるのが妥當であろう。その際、懸穴住居を管んでいゝか、傾斜面を利用した簡単な作りの掘立て小屋のようなものであつたか問題となるが、後者の可能性が多いとも云える。

地形的にこの場所に住居を管んだことは、水の便の悪

い点から考えると、高く見て晴しよの場所を選んだことになる。小高い見晴しよの場所は、身の安全のためにも、行動する場合でもよかつたと考えられる。なお、現在この場所は風当たりが強く、住居を管むに適しないが、原始時代樹木の繁茂していた時代には、現在畑となつてゐる状況と相当違つていたであらう。

二 上ツツカ遺跡

概況

本遺跡は中野小学校より北の八木へ通ずる国道を一行ほど行くところ、左手の丘陵の登り口に有家神社がある。その神社背後の丘陵一帯から縄文式土器片や石器などが見集される。調査した地点は神社より二百米ほどの丘陵台地を登つたところの南傾斜面の一部である。この丘陵は東に向つて張り出した舌状台地で、その南斜面は十五米ほどの高さで、相当な急傾斜をしている。しかし所により二、三米下つたところに段があつて、それまで約八米ほどの中で緩傾斜をしている部分がある。この傾斜面一帯の地表面には相当多数の土器片の散布がみられる。(図版第七のa)地主は中居松五郎氏である。

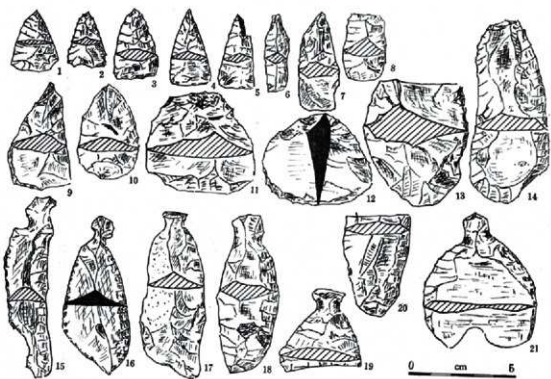
調査は急傾斜面のところは困難なので、緩傾斜面の一部を選び試掘溝を入れて、包含層の状態を調査することにした。この場所は雑穀栽培の畑になつてゐる。その耕土となつてゐる黒土の堆積層は浅く、十釐から三十釐ほ

どしかなかつた。表土を十五厘位除去したところに、一ままとりとなつた土器片がところどころに発見された。従つて、ゴソツウ遺跡の場合と同様、包含層が粘土と接しているため、横倒しになつて取し潰されているものは一応形が復元出来るだけの破片は残存しているものもあるが、立つた形で埋蔵していたと考えられるものは、底部が口辺部が残存しているだけで、他は全く散乱して復元は困難であつた。横倒しになつたものは破片の全部づつていゝものはなく、一部散佚してしまつてゐる。九だ、ゴソツウ遺跡の場合に比べて、開鑿されて畑になつた時期が新しいのか、表面に散布してゐる土器片も多く、また地中に埋蔵している部分も比較的多く、復元出来るものは五個を数えることが出来た。今後耕作によつて年々破壊されて行く状況にあることを考えると、早急に全面的調査を実施する必要があることが痛感された。

出土遺物

出土した土器は縄文式土器だけである。その作りや文様、器形などから見て、ゴソツウ遺跡出土の三種の縄文式土器の範囲に入ると考えられたが、土器の数も多いだけ、文様の変化も多い。ゴソツウ遺跡の場合に準じて、才一類、才二類、才三類に分類した。その文様の特徴は同一であるから、説明は略する。

本遺跡では、才一類、才二類が多く、殊に才一類の割合は、ゴソツウの場合より多くなつてゐる。才三類の頭



第8図 上のマツカ遺跡出土石器類(1)
1~6石鏃; 7~14 B類石匕; 15~21 A類石匕

部に隆起線文を周くらしあるもに、その隆起紐の真中に溝を入れて二条の隆起帯のような効果をあげ、更に口頭部の文様を沈線による直線と波線とで施してあるものがある。(図版第三の3(右右下))一見異質な感じを受けるが、器体に縦帯が含有し、口線に縄文が押されている点、この場所から他の土器が出土せず、才一類、才二類土器と伴出している点などから、才三類の変形と考えられて差支えないと思ふ。なお、才二類に入る土器片に一片だけ三条の平行沈線をもつて口頭部の文様帯を構成してゐるものがある。また才三類に入る図版才三の3(右右上)の土器は、隆起紐の溝は摺糸で押えて作つてあり、口頭部の文様は摺糸を押捺してある点、施文材料が違つても、手法は同一と考えられる。

本遺跡の調査によつて得られた土器は以上の三種頭であるが、下の方の畑から円筒下層D式と考えられ、口頭部の文様帯が肥厚して、胴部に細かい羽状縄文の施文されている破片(図版第三の3(同上段中央))が発見されている外、瓦沢重作氏がこの付近から採集したといつてゐる土器片や土偶その他の遺物に、縄文中期の円筒上層A B式の破片や縄文後期のものがある。殊に獸骨片や骨角器、貝輪(図版第五の19(四))などあり、貝輪の存在も考えられるので、この付近一帯は更に精細な調査を必要とすると考えられるが、参考に一、二の遺物を図版で示すにとどめ、今後の調査にその精細な報告は期待したいと思ふ。

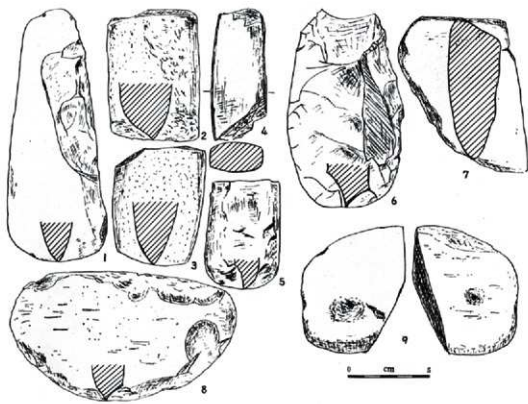
思ふ。

出土石器は三十点で、種類別に云うと、石鏃六点、石匕十五点、石弁九点、板状石器一点である。

石鏃(辨四第三四一)は全部無茎の三角形の石鏃である。その形から前期縄文式土器に作出して妥當な種類に限られていた。(辨四第三回は図版第四の8(四)、辨四第四回は図版第四の4・5(四)の石器の実測図である)石匕(辨四第三四一)はゴソツウ遺物の説明によつてA類、B類に分けて十五点で、A類は板形が主で、九だ一点円形で刃部の中央にほんだ刃をつけたものがあつた。B類はゴソツウの場合と同様形が一定しないが、中には板形の石匕の塊みかたれたのを、そのまま形を整えたのではないかと思はれるものもあつた。(a) (a)

石弁(辨四第四一)は磨製、散製、打製の三種に大別される。磨製二点(4・5)、散製二点(a, b)である。打製は打裂のみで形を整えた粗雑な形のもの、チャッピングによる整形したものがある。横刃形石弁(7・8)は二点あり、一点は完形であるが、他は半分だけしか打石器というより、彎曲部の刃部をこすつて磨りへらしてあり、磨研用に使ひられた痕跡がある。

板状石器(辨四第四四)で、ゴソツウ出土のものと同様似、小形の扁平の石器で、軟質砂岩でもろく、上下の両面に鑿孔しかけた穴があり、鑿孔する場合の押えと



第4図 上のマツカ遺跡出土石器類(9)
1~6石斧(うち4磨製石斧)；7,8横刃形石斧；9板状石器

した石とも考えられた。

まとめ

以上の出土遺物によつて知られる本遺跡は、調査した範囲に関する限り、前期はじめの単純遺跡として、相当内容のある遺跡で、果下で重要な遺跡の一つと云うことが出来る。しかし前編で述べたように、他の時期の遺物(包含地あるいは貝塚さへ存在すると考えられる本遺跡は、広範囲の調査を行つて、その内容を明らかにし、遺跡としての内容を明らかにして、価値付けることが必要と考えられる。その意味で本調査は本遺跡の全般的解明にとつては不充分であつたが、その收穫は少なくもなかつた。

三、大宮遺跡

本遺跡は中野小学校より東へ直線距離一軒ほどの海岸に臨む丘陵に位置する。小学校より現地に行くには山間の小径を小一時間歩いて到達する。陸中野駅より鉄道沿いに北へ一軒ほど進んで、丘陵に登つてもよい。丘陵は高さ三十米ほどで、海岸に沿つて連なつてゐるが、その一つである。行政区画は大字中野才六地割で、通称大宮遺跡は畑を歩いてゐると、相当採集される。地主は高屋敷松五郎氏である。

畑の表面には相当広範囲に及んで土器片その他石器などが散布してゐる。海を見下す丘陵の頂上部分から、中野

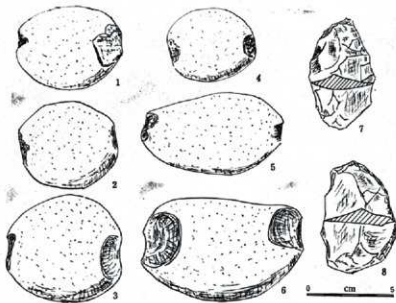
小学校に通ずる山道のある丘陵西側の山合いの麓まで、約二百米の範囲に散布してゐる。従つて、本遺跡を東の方から大きく、A・B・Oと区画すると、A区は海岸上りの部分であり、O区は山合いの丘陵への上り口の麓で、Bはその中間の畑といふことになる。以下夫々特徴があるので、分つて述べることにする。

(1) 大宮A遺跡

海を見下す丘陵台地の部分で、ほぼ平らな畑となつてゐる。雑穀が栽培されているが、余り收穫がなく、余り良い土地とは云えない。土器の小破片が採集されるが、全部貝殻文土器で、尖底部近い破片も発見された。平底と考えられる破片はない。図版才三の1図は口辺部の破片のみの写真であるが、表面採集による破片の数は百点以上を数えることが出来る。この破片と混つて、この地区から採集されるものに、石鏢と皮刺ぎ用のB類石匕がある。

石鏢(挿図第五回15)で、私の關係して採集した石鏢だけで十一枚あり、その他佐々木剛一氏や中野小学校所蔵のもの十枚以上ある。石鏢は徑五厘内外の楕円状を帯びた扁平な川原石の両端を打ち欠いて作つたもので八市の早期の遺跡に出土する石鏢と似てゐる。(挿図第五回は図版第四のa図の石器の奥側面である。)

石匕(挿図第五回7・8)は普通の石匕の形をしたA



第5図 大宮A遺跡出土石器類
1~6石鏢(うち6はB類鏢出土石鏢)；7,8B類石匕

類のものではなく、皮刺ぎ用としての不整形なB類石匕が二点採集されている。

以上の包含状態によつて得られた遺物であるので、実際の遺物の包含状態はどうであるかと、ボーリングしてみたが、二十種足らずの耕土しかなく、直ぐ地盤のローム層となつてゐる。海岸で相当風当りの強いところで、耕土が吹き飛ばされるか、特に包含層らしいものを認めるところは出来ない状態であつた。従つて、堅穴住居址らしい痕跡を認めることが出来ず、土器は表面採集だけの小破片にとどまつた。文様から推定される器体個数は、相当あり、図版才三の一図に示した土器はいずれも刃部だけのものであるが、器体は全部別個体で十四片ありその他胴部・底部と考え合はずと二十個体を超える數になることは明らかである。

(二) 大宮B遺跡

概況

A遺跡より西方へ幾分下り気味の畑を八十米ほど行くとB遺跡となる。この間の畑の表面一帯から早期の土器片が僅かながら採集されるが、B遺跡とした部分の畑になると、早期の貝殻文の土器片の他に、織維の含有した前期の縄文式土器片の外に、縄文晩期大洲A式の破片と弥生式土器片が多く採集される。従つて、その地点を中心とする約五アルの畑をB遺跡とした。

A遺跡からB遺跡までの一つづきの丘陵の遺物包含層

深さも地表面から九十厘の深さがあり、粘土のローム層に密着しているため、注意を強くうけて、脆く壊れ易い状態になつてゐたが、湿気を強く上げられた後、復原出来る一個体の尖底土器(図版第一の8図)、器形の推定出来る一個体の尖底土器(図版第一の10図)を含めた五個体分の土器片の集積であつたことが知られた。

このような復原可能土器の発見されて取り込まれたものなところは、不整形で人工的なものを強く感じさせながら、もつと掘り抜けて細細に調査すれば、堅穴住居址としての輪郭を明らかにすることも可能と考えられたが、今度の調査は試掘程度に留めて、その追求を避けた。しかし、岩手県で早期の住居址の明らかとなつてゐない現在、その再度の調査が期待される重要な遺跡であることを見指すにとどめる。

出土遺物

土器では縄文早期の貝殻文土器と弥生式土器とが特に注目に値する。岩手県で貝殻文様の土器片の発見される場所は相当多数あり、中でも玉山村戸戸遺跡などではその數量も二百片以上を数えているが、完形または復原可能な土器を出してゐる場所はない。この大宮B遺跡の調査によつて、はじめて復原された貝殻文の尖底土器が発見されたことは多大の成果と云うことが出来る。一方の復原推定土器は上半部の器形から、八戸市赤御堂出土の尖底土器を参考に復原したものであるが、大方の教示

の状態は明らかでないが、この付近は、ボーリングによつて相当厚い堆積土があり、A遺跡と違つてゐることがわかつた。そこで、東西二米の中で、南北に長さ十米のトレンチを入れて試掘を行った。

調査の結果判明した堆積土の状態は、低いところに厚く堆積した黒土のようで、黒土の厚さは七十厘あり、その地表面近く二十種内外が耕土となつてゐるが、その判別は明らかでない。黒土層の下七十厘位から黒褐色の粘土混りの層が二十五種ほどあり、この層は下に行くほど褐色味が濃くなつてゐた。その下の九十五厘からはローム層となつてゐる。この黒褐色の才三層の一部(トレンチ内で四・五米の巾)が切れて、不整形な落ち込みを形成してゐるところがあつた。

遺物の包含状況は、耕土層を含めた黒土層では、地表面に土器片の散布してゐるのに比べて、比較的少なく、破片も小さかつた。土器は地表面から採集される弥生式土器片、晩期縄文式土器片や織維のある縄文式土器片の外貝殻文の破片も採集されたが、層位的關係が明らかでない状態ではない。ただ弥生式土器片や晩期縄文式土器片は下の方からは発見されなかつた。図版才三の8図に示した土器は、表面採集のものを含めた主なものである。

黒褐色の才三層になると早期貝殻文の破片だけとなり疎に落ち込んでゐると見られる地点の黒褐色土層では、ローム層に密着して一群の土器片の集積が発見された。

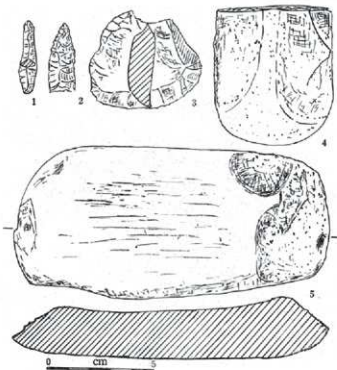
を得たい。両土器器面は貝殻糸痕で調整されたもので、口縁部に貝殻線のギザギザの刻み目がつけられている。

(図版第一の10図、9図)

弥生式土器は縄文晩期の大洲A式の工字文や菱文と一様で、それから若干変化した文様のもので、二戸郡福岡町足沢出土の弥生式土器と著しく類似してゐる。今度の調査でははつきりした包含層に当らず、大部分が表面採集であるので、その資料を示すにとどめ今後の調査によつて詳細に述べたいと思ふ。

石器(押図第六圖)は表面採集を含め、B地区で発見されたものを5点示した。石鎌2点・石匕1点・石斧2点計5点である。石鎌はいずれも表面採集。石匕はB類のツマミのない形式で、黒土層下部部から発見されたものである。石斧2点は黒褐色土層の貝殻文土器の近くから発見されたものである。(押図第六圖は図版第四の4の石斧の奥側である。)

4の石斧は上部が欠失してゐるが、石斧状の断面楕円形の自然石の四隅を欠き取つて更に形を整えよとしてあるが、刃部に当る先端は自然面のままである点から、石斧と称するのが適切であるか疑問もあるが、形から受ける印象は石斧の断片であるが、古い石器の一つの形を示している。5は更に特徴のある石器で、扁平な矩形の自然石の一方の先端部に打撃を打ええて刃部を形成しただけの単純加工の打石器である。この刃のつけ方も、片



第6図 大宮B遺跡出土石器類
1・2石鏃；3B形石匕；4石斧；5石斧

面が自然彎曲をしている内側を打ち欠いてつけたもので、打石器として原始的形跡のものである。4・5の石材は硬質砂岩である。

④ 大宮C遺跡

B遺跡付近から丘陵は、南方に下り坂となり、百米ほど下ると山合いの湧き水の出るところになる。小川はそこから水源を発している。その湧き水の出る手前が一段と高くなって、三十平方メートルの狭隘な平坦部を形成して、灌木の茂みとなつている。弥生式土器片の採集される遺跡であるので、特にこの遺跡とした。

この平坦部から上の傾斜面は畑となつてはいるが、この部分は最近まで杉が植えられていたらしく、その根を掘り起して畑にしようとしたらしくも見られるが、充分整地もされず灌木の藪のようになつてはいる。土器片はその掘り返えされたような地表面に僅か散在するだけであるが、岩泉町赤穴遺跡などの出土土器と類似する弥生式土器である。遺物は表面採集されたものだけであるが、果して調査して良好な包含層が発見されるかどうか疑問である。

図版オ三の7図に示した土器は、佐々木剛一氏の採集品であるが、私も現地においても同じような土器片数片を採集している。石器類は未だ発見されていない。

四、高取遺跡

概況

檜市町で土器の出土するところと云えば高取と云われる程、近年開墾などで土器が発見されたと云われているが、既出土品の完形土器で私の見たものは、鉾石町長所南の土器二個(図版第一の9図と10図)である。その他町村に持つて行かれてはいると聞くが、その真偽は明らかでない。

高取遺跡と云つても、その範囲は広く、どこを指しているか明らかでないところがある。なぜなら、高取は檜市町の丘陵中央に位置する標高三六〇米の高取山南側の山麓丘陵地帯で、その範囲は広く、精細に踏査すれば、相当の箇所から土器の出土地が発見されるらしい。その中調査したのは今野勝也氏の畑の一部である。

最近今野氏の畑の一部が開田されて土器が相当出土しているというので、稀省を予定して九日の午前中だけ二時間程、現地に行つて見ることにした。現地に行つて見ると、開田は家のうしろ横に当る、丘陵の緩傾斜地の一部が一二年程前にされたらしく、丘陵の裾が新しい切断面を見せて田が作られていた。その田を縁どつている丘陵の切断面には、地表面から二十釐位の深さのところには土器片が十釐位の厚さで一つの包含層をなして存在していた。その状態からこの地の開田の際に相当多数の

土器が出土したのではないかと推定されたが、殆んど全部が埋没されてしまつたものらしい。現在でもその断面をえぐれば土器片は採集されるが、切断面が丘陵側の傾斜面にかかつてはいる上に、その部分一帯に大きな樹木が生い繁つてはいるので、調査は困難な状況になつてはいる。

その開田されたところに隣接した畑も近く「アール」は開田が予定されていると聞いたので、この機会にその一部を試掘することにして、巾二米で長さ六米のトレンチを入れて調査した。地表面下二十釐で包含層があり、土器片の出土が見られたが、開田地の上の切断面から見られる程多量の包含状態を示してはいなかつた。しかし一か所に山石八個(直径四十釐位の円形の凹いした炉址)が発見された。(図版第七の6) なおその炉址の付近からは浅鉢形の完形土器二個が出土した。(図版第七の7) これら土器や炉址の位置は地表面二十五釐位で比較的浅く、一部耕土に接している状態であつたので、堅穴住居かどうかの輪郭となる盛の存在はこれを認めることは出来なかつた。また充分に掘り抜けて柱穴址などの有無を確認する必要があつたが、当初の日程もあり、一応炉址の確認と土器を採集しただけで、今後の調査に期待することにした。

本遺跡の調査は僅か二三時間の限られた調査でその全貌を述べることは無理であるが、開田をひかえて緊急に全面的調査を必要とするところであると考へた。しかし

しかし取り敢ずの試掘であつたが、種市町としては縄文時代住居の伊址としてはじめての発見であつたことは多大の成果であつた。

出土遺物

出土遺物は完形土器に二点を含む縄文式土器片若干と石斧二点、石鏃二点、有孔小円盤である。

土器は付近から採集されるものを含めて、縄文晩期大洞⁽¹⁾式以降A⁽²⁾式までのものである。完形土器の一方(圖版第一の11圖)は大洞A⁽²⁾式の浅鉢形土器であり、他は大洞⁽²⁾式の浅鉢形土器である。両者がどういふ関係にあるかは明らかでなく、層位的関係も確認し難かつた。破片として多いのは⁽²⁾式である。

なかま⁽³⁾々木剛一氏所蔵の高取採集土器片では後期の掘の内併行式・安行併行式と考えられるものがある他、晩期大洞B⁽²⁾式・B⁽²⁾式の破片もあるが、それらの出土地は高取といつても同じ場所かどうか明らかでない。また図版⁽⁴⁾に示した久館石基治氏所蔵の完形土器は一方は大洞A⁽²⁾式(9圖)で、他方は大洞B⁽²⁾式(10圖)である。この出土地の精細も不明である。

石器(圖版第五の1圖)の石斧と石鏃は特に注目すべきものではない。有孔小円盤と称したのは圖版⁽⁵⁾の1圖の左下に示したもので、土器の破片を一厘錢のよりの円盤状に形を整え、中央に孔を開けてあるもので、縄文晩期の遺跡から良く発見されている。糸をつむぐ紡錘車の一

種かとも考えるが、未だ明らかでない。

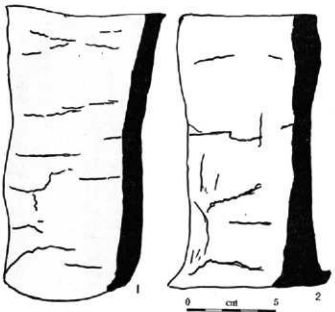
五 城内遺跡

城内は久慈縣種市駅の西方六軒にある山間の部落である。中世この地方を支配していた種市中務の居城のあつたところとして繁栄していたところであつて、江戸時代も種市地方としては最も栄えた中心地であつたが、今日鉄道沿線からはずれた城内は山間に取り残され、新しい変化をなすこともなく、山村部落として昔ながらのおもかげをとらめていくにすぎない。

昭和三十五年この城内地区の西方丘陵際の台地の開田が行なわれた際、円筒状の土製品が出土した。その報告を受けた長岡善一郎氏が、それを見て少し小さいが埴輪円筒ではないかと思ひ、古墳の存在が確かめられるかも知れないと思ひ、急拠その調査の必要を感じて調査計画をすすめることになり、小生に連絡して来たのが今度の調査の端緒となつたものである。

(1) にしやくどう遺跡

円筒状の土製品(圖版第七の1)の出土したところは、俗に「にしやくどう」と云はれてゐるところで、城内部落の民家の所在地より一軒ほど行つた山麓の台地である。現地に既に水田となつて耕作もされたさうで、⁽⁶⁾ 昔先⁽⁷⁾こ⁽⁸⁾で稲の刈切がならんでゐた。灌漑施設が不充分か、水が



第七圖 にしやくどう遺跡出土 器台

田に溜つて中に入ることも出来な⁽⁹⁾い。た⁽¹⁰⁾陸⁽¹¹⁾畔⁽¹²⁾の⁽¹³⁾枯⁽¹⁴⁾草の中に五十種大の川原石から二十種大の川原石など数個が一かたまりとなつてあつて、土製品の出土したところから出土したものと物語られた。川原石には若干焼けてゐるところが見られた。(圖版第七は圖版第二の11圖の器台の例圖である)

以上のように川原石も既に取り上げられてあり、その石のあつたといふ付近を調査して見ようにも、現地が水浸しの状態では調査の致しようもなかつた。石の表面は

火がかつて焼けてゐる痕跡も見られるが、どのように用いられてゐたものかは全く不明である。

円筒状の土製品はその作り、焼成からみて焼台と考へて差支えないものと考え、焼き台となつて二つだけであつたのかどうか、これを使用した焼窯となつて、陶器を焼いたものではないかとも考えられるが、それに關係した遺物の報告はないので、また時をかえて調査して見ないとはいつきりしたことは云えない。本遺跡の地主は八木勝三郎氏である。

長岡氏がその付近から採集したといふものに、糸切底の土器器の皿(圖版第二の2圖)があるが、これは前篇⁽¹⁵⁾第三章で述べた久平安時代の須恵器と一緒に出土する土器と考へて差支えないものである。これがこの焼窯に關係ある遺物かどうかは不明である。無關係のものとも考えられる可能性の方が大である。なぜなら、この付近の畑からは土師器の破片が採集されるし、現に今度の調査でも、最近開田整地されたばかりの場所に土師器の散布が認められていた。従つて、この付近は調査すれば土師器關係の遺跡の発見される可能性もあるところであつて、焼窯と無關係にそれ以前の遺跡が存在してゐたところであつたと思はれる。

陶器の焼窯という推定は、この地にとつて思ひ及ばぬことかも知れないが、最近寫巻町の山間部の馬場⁽¹⁶⁾に、記録も伝えないところに陶器の焼き窯が発見されてゐる

例もある。^註この場合器台の形はそれより古い形をしてゐることは明らかであるが、陶器の破片らしいものも発見されてゐないので、明確な断定は今後の研究に期待することにして一応の報告とする。^註吉田義昭、高橋昭治「岩手町葛岡町田部子馬場所在の古くま遺跡について」(奥のふる里9号)

(二) 梅内遺跡

概況

本遺跡は域内部落の北はすれの山麓梅内敏雄氏宅の裏手の畑である。梅内氏が自宅修理のため壁土を採取するため、裏手の畑の一角を削り取つていた際、高さ三十厘の甕が出土したので、珍らしいと思つて域内小学校に持参して置いたものを、偶然長岡氏が目に留めた。今度の調査で行つた際、長岡氏よりその報告を受けたので、域内調査の折に現地を調査することにした。遺跡は梅内氏宅裏手の丘陵麓の台地で、段丘となつてゐる一角を削り取つたところにあつた。行政区画は種市町五十六地割二十八番地であるが、便宜梅内遺跡と仮称する。

現地に行つて聞くと、甕はごく最近出土したばかりで、完全に珍らしいので学校に見てもらひに持参したとの事であつた。その他の破片の有無を確かめると、存在したが散佚してしまつたとの事であつたが、先にコシキの

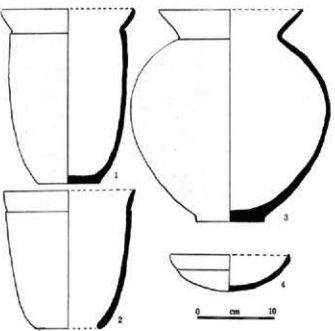
大きな破片が投げ棄てられてあつた。貴重な資料と早速収集した。

甕土を取つて土器の出土したところに行つて見ると、土器片が三見えたので、そこを掘り抜けて見ると、一群の土器片を中心とした遺跡があつた。(図版第七の3)取り上げられた結果一個の甕と皿が復原出来た。

この種の土器器が一括して出土するところに、堅穴住居址の輪郭のはつきり発見される例は、金ヶ崎町西根堅穴住居址群の例のほかしばしば体験してゐるので、住居址らしい痕跡が確かめられるのではないかと思ひ、土器の出土地点を中心に拡張して見たが、既に相当破壊されてゐることもあり、はつきりしたものを確かめることは出来なかつた。然し一個の完全な甕を手掛かりに、現地を調査した結果、一応土器器としては甕・甕・皿・甕(コシキ)の一括遺物を収集することが出来たのは幸いであつた。なお復原は出来なかつたが甕の破片は五個体分、皿の破片は二個体分を数えることが出来た。

出土遺物

出土品は土器器だけである。完形品は甕一個、復原可能は甕・皿・甕各一個であるが、破片は復原五個体分、皿二個体分、甕一個体分の断片であるが、復原出来るまでのものはなかつた。作りは輪轆法で、器面の調整にはヘラまたは刷毛を用いて仕上げたもので、轆轤を使用して作つた土器はない。前期土器器といわれる種類に入るも



第8図 梅内遺跡出土土器器
1 甕; 2 皿; 3 破片; 4 皿

ので、金ヶ崎町西根土器器と同一形式と考える。次に完形復原土器について説明を加える。

甕(図版第八の3・図版第二の1)は高さ二十七・六厘で、普通の大きさである。胴部は径二十六・二厘で比較的影響らみのある方である。器面は刷毛で調整してあり上胴部は斜行し、下胴部は下向している。貯蔵用の容器と考えられる。なお、この種の甕は横手地区開田の跡にも出土しており、佐々木剛一氏が所蔵してゐるので、参考に図版第二の8図に示して置いた。これより若干小形である。

甕(複製第八の1・図版第二の1)土器器の甕は長胴形現で、甕は頸部のくびれが著しいのに、頸部のくびれの著しくなく胴部の影らみのあるものをいう。カマドのせて沸湯に用いたものである。下胴部に焼け無げの痕がある。復原した形は高さ二十二・八厘、口径十八厘、底径八厘である。器面は刷毛目を上下用いて調整してある。底は木質底である。土器器の現の完形品が「中野向ながれ」から出土してゐるので、参考のため図版に示した。この形がこの時期の甕では普通の形である。

皿(複製第八の4・図版第二の4)は杯・碗・盃などと云われてゐるものを一括して皿と称してゐる。ここに復原した皿は浅碗といわれるのが適當であると考えられる。前期土器器の皿は底部が丸底であるに特色がある。高さ四・八厘、口径十五・二厘である。

甕(複製第八の3・図版第二の3)はコシキと云われるもので、穀物を蒸すサキロである。従つて底部が開いてゐる。恐らく笹竹で編んだ敷物を入れて押えとし、その中に穀物を入れたものである。これを甕の中に入れ、甕の中の沸騰する蒸気によつて穀物を蒸したのである。この甕は大和時代の農耕日本人の使用された土器である。本遺跡で種市町では存在して甕が発見された。恐らく他の土器器の遺跡にも存在したものであろうが、壊れてゐたなどでは破壊してしまつたのであろうが、土器出土間もな時期にたずねて、収集保存出来たのは幸いであつた。こ

の飯は高さ十八釐、口徑十七釐、底徑七・五釐である。

(イ) 城内館址 (圖原第七の8圖)

中世律市中務の居城したと云われる城内館址は城内部落より西南方大沢部落に行く途中に丘陵に位置する。周りに空濠を周くらし、上が平坦な台地になつてゐる。岩手県内に一般に見られる中世の館址の様式をとつて調査してみないと明らかなでないが、その丘陵平坦地には館址時代の遺構の存在することが推定される。しかしこのような館は常時の生活の場所というより、非常の場所に立籠つた居城であらうと考えられる。

種市氏は南部偏直に服し、慶長六年岩崎攻めの時出陣し、その時の勢揃い一番備の中に、「六百石 種市中務 十八人 持槍二柄 弓二張 鉄砲三挺」とある。妻は八戸彈正少弼政義の族新田左馬助政盛の女である。光徳の子孫三郎南部重直の時罪ありて、祿を没収せられ浪人となり、慶安二年十月病没して断絶したと云われている。しかし、その一族は後にまで存続している。

六、館野遺跡

長岡氏が城内小学校に保存されていた円筒下層D式(圖原第三の4圖)の特徴ある破片を持参して見せて呉れた。城内に行つた際、その出土地を問うたところ、その答は明らかでなく、ただ縄文式土器は館野に出土するからその破片が採集された。

以上昭和三十六年四月末から五月初めにかけて調査した内容とそれによつて知り得た遺跡の概況を写真図版や挿圖を添付して報告した。短日時の調査で遺跡を一通り

第四章 その他の遺跡調査

一、昭和三十六年度岩手県内遺跡台帖作成調査

種市町担当者 佐々木剛一・重茂輝子・山田洋子

本調査は以上の調査担当者の外、玉沢重作氏などの踏査によつて知られていない遺跡の現状を主として調査記録したものであり、才三郎に調査報告した遺跡も含まれてゐるので、その分は除外した。文は記録に基づき、草間が記述した。

1 藤野沢遺跡

粒米七地割二五

山林が近年一部開墾され、土器や石器が出土している。完全

な石刀一点(圖原第五の5圖)出土している。

2 蝦夷塚遺跡

粒米

山林中にけだ地あり住居址ではないかと云われているが、出土品もなく不明

3 長根塚古墳

長根

長根の丘陵台地の間に二十米位はなれて二つの石塚がある。

小笠原透賢が古墳とし、岩手県史にも古墳として取り上げら

こかも知れないという程度であつた。城内の調査が実際は何も無くて、予定より早く終了したので、その帰途館野遺跡を踏査して見た。

館野は種市駅より城内に行く途中、城内の手前の部落である。遺跡は館野石蔵氏宅の裏手より北へ一軒ほど山合いに入つたところに関ヶ山麓の緩傾斜の畑である。畑は約十アールほどの雑穀畑で、畑の表面に石器や土器が散布している。殊に春さきの耕作前の畑の地表面からは土器や石器が採集された外に、畑の隅の小石を積み上げた場所からは石斧片などが多数採集された。

包含層の状態を調査するため、小範圍の試掘を行つたところ、沖積土は五十釐の厚さで形成されてゐるが、表面採集の遺物に比して豊富なお包含層らしきものには当らなかつた。従つて、本遺跡の遺物は殆んどが表面採集によるものである。

採集した遺物は石斧片が母多く二十数点を数え九が、図原才三の8圖に示したものはその中特徴のあるもの二点である。大部分は敷製の粗雑な作りで、図の右上の二点のものである。磨製は少なく、右下隅のものと左側二段目の小形石斧の二点であつた。図の左側二段目三番目の異形の石器は剛する道具の形をしている。広い意味の石じの中に入れるべきかも知れない。

採集した土器は図原才三の8圖に示したが、殆ど全部後期の土器であるが、ただ一片図の右下隅の晩期大酒盃の踏査した程度ではあつたが、多数の人々の御協力によつて、その知り得た收穫は少なくなつた。報告はもつと遺物の内容を精細に述べたい点もあつたが、余り細部に亘るので一通りの説明にとどめたことをおとわする。

れているが要がわしい。

4 黒マツカ遺跡 有家二十番割

山林のところ、水田になり殆んど破壊してゐる。具塚と思はれるところあり、縄文土器や石器を出土すると共に、土師器

5 小内具塚 小内

遺跡によつて殆んど破壊されてゐるが、現在も町貝殻が崖の断面に出土している。遺物は不明

6 長坂遺跡 長坂

畑で、縄文後期・晩期の破片が表面から採集される。袖山遺跡 八木袖山

7 畑で、表面から縄文中期・後期の破片や石器などが採集される。玉沢重作氏所蔵の石製模造品(圖原第五の9圖)の発見されたものこである。

8 八木具塚 八木第一地割

駅前公衆浴場建築の際に多数の土器・石器などが出土したといわれる。玉沢氏は晩期の完形土器二点と骨へらを所有して

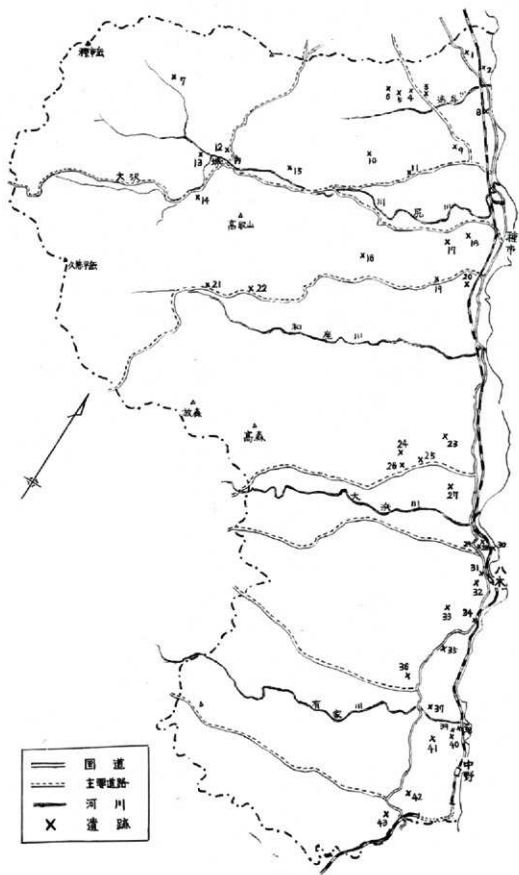
種市町内遺跡地名表

昭和 88 年 8 月 80 日

本地名表は現在知られているものを一応記入したものである。知られているものでもその内容が明らかでないもので省略したものがあるので、今後追加が予想され、その結果は更に新しい事実の明らかになることもあると考えられる。尚、遺跡の内容については本文の記事と参照出来る様に頁数を加えて置いた。尚これを機会に町内の出土品がみだりに散佚することがないようになれば幸いと考えている。

種市町内遺跡名

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
	たけの子	館野	城内館址	にしやくだう	梅内	櫻割	安沢	石倉	大谷地	寛巻	北野沢B	北野沢A	伝吉B	伝吉A	浜谷	遺跡名
60	◇	58	54	56	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	参照頁
82	81	80	79	78	27	26	24	23	22	21	20	19	18	17	番号	
袖山	八木駅前(八木良塚)	ホツタリ	大平B	大平A	向山	西館上岡谷	西館	西館の田	戸頭家	高取	和座	ゴツソウ	大久保	横手	トチの木	遺跡名
◇	59	60	61	60	61	◇	◇	80	61	53	61	41	◇	◇	60	参照頁
																番号
																遺跡名
																参照頁



昭和三十三年九月一日
昭和三十三年九月十日

著者 草間 俊一

発行者 高城 専太郎

印刷所 河北印刷株式会社

発行所 種市町役場